

## 連続公開シンポジウム

# 「司書教諭資格付与科目の教育実践を検討する」 第3回「読書と豊かな人間性」記録

(2016年7月30日(土)実施;立教大学池袋キャンパスにおいて)

## 朝比奈大作「読書と豊かな人間性」の教育実践

「読書と豊かな人間性」の教育実践	朝比奈大作 2016. 7. 30 立教大学
授業の前提 (自己紹介を兼ねて)	
心ならずも 東大教育学部に進学して「図書館学」に出会ったこと。	
横浜市立大学に就職して (一人だけの)「司書・司書教諭講座」を任されたこと。	
当時は司書教諭資格は「司書資格に必要な単位+教職課程の単位+『学校図書館概論1単位』+『児童青少年の読書と資料1単位』」によって得られたこと。司書教諭資格取得希望者は決して少なくはなかったが、その資格を生かすチャンスは限りなく少なかったこと。	
「初めての教育学部出身の図書館学教員」であったため、上記の2単位を半期1コマにまとめた講義を、いくつかの大学から非常勤講師として委嘱されたこと。(現職教員向けの「司書教諭講習」を含む)	
教職を目指す学生諸君が多少なりとも「図書館学」を学んでくれることが、日本の教育のあり方そのものにある種の刺激になり得るのではないという期待を持って、これらの依頼にはなるべく応えてきたこと。	
従って、講義の内容は「学校図書館における利用指導」(現在の「学習指導と学校図書館」)に重点を置き、狭義の読書指導の問題にはあまり触れなかったこと。	
司書教諭講習の科目変更に伴い、司書課程と司書教諭課程が切り離されたこと。「読書と豊かな人間性」という科目名は大学の科目名になじまないと考えたこと。	
放送大学の司書教諭講座の講師を委嘱されたこと。当初は『図書館資料利用論II』の利用指導に関する部分を(堀川照代さんとともに)担当していた(読書指導の部分は増田信一氏)が、上記の科目変更に伴い、『読書と豊かな人間性』を担当せざるを得なくなったこと。	
樹村房の司書教諭テキストシリーズ『読書と豊かな人間性』を担当したこと。	
横浜市立大学退職後もいくつかの大学で非常勤講師を続けているが、いずれも『読書と豊かな人間性』のほかに、『学校経営と学校図書館』『学習指導と学校図書館』をも担当しているため、この科目の授業内容は他の2科目の講義内容を「ふまえた」形になるよう配慮し、(文科省の学習指導要領に準拠するという意味での狭義の)「教育的視点」ではなく、「図書館学の視点」からの講義を意識している。	
- 1 -	

朝比奈と申します。今年、古希になりました。年寄りが出しゃばるのもどうかと思ったのですが、昔の経験をふまえて少しお話しさせていただきます。配布資料の最初に、「授業の前提(自己紹介を兼ねて)」と書いてあります。時間が足りないのであまり詳しいことはお話しませんが、東大で専門課程への進路選択に失敗しまして、心ならずも教育学部に進学したらそこに図書館学という講座があって、それで図書館学をはじめたわけです。大学院を出まして、横浜市立大学に就職したのですが、そこがまたとんでもないところでした。事情があって7月採用になったのですが、前任の図書館学を担当しておられた、横山孝次郎先生という方は、当然3月末に退職しておられて、引き継ぎをしてくださる方がいないのです。海のものとも山のものともわからない。教務課にどんな授業を担当すればいいのです

か、と聞きに行ったら、國學院大学の前島重方先生という方が非常勤講師にいられていて、その方に聞いてくださいという話だったので。資格取得のための講座だから、4年生の就職・卒業希望者で単位・資格取得希望者がいるなら、そのための講座は開かなければいけないということになって。確か7コマか8コマはあったと思うのですが、担当しました。

で、資料の3段目ですかね、当時の司書教諭資格というのは、司書資格を取って、教員免許状を取って、それにプラス「学校図書館概論」と、「児童青少年の読書と資料」、それぞれ1単位ずつなので合わせて半期1コマ、これだけ取って司書教諭の資格が得られるということになっておりました。この科目もどうしても後期に開かなくてはいけないということだったわけです。もちろん、司書教諭資格取得希望者はかなりいたのですが、当時は司書教諭としての就職のチャンスはまったくありませんでした。現実に司書教諭は全国に一人もいないという状態でしたので。ですから、私としては図書館学の視点からものを見るという形で教師になってくれれば、これが一番よいのではないかと考えたわけです。仕方なしに、いわゆる読書指導論の参考書なども慌てて読んでみたりはしたのですが、どうもあまり内容的に感心しなかったものですから、そういう形の講義をとりあえずやったわけです。そうしましたところ、教育学部出身の図書館学者、今は中村先生をはじめとして学校図書館専門の方もかなりおられますけれども、当時はほとんどそういう教員がいなかったものです

から、非常勤をあちこちから頼まれてましてですね。それで講義を最初の何年間かかかって少しずつ膨らませながら考えてきたわけです。今、申しあげたように、教職を目指す学生諸君が多少なりとも図書館学を学んでくれることが日本の教育をちょっと変える可能性につながるのではないかと、というような意識をもっていました。何しろ、文部科学省が管理する日本の教育というものあまり好きでなかったもので、少しその視野を広げてみたということになると思います。したがって、講義の内容は学校図書館における利用指導、つまり現在の「学習指導と学校図書館」の内容を主として話して、狭義の読書指導の問題には意識的にあまりふれなかった、そういう形でありました。

司書教諭講習の科目が現在の科目になった時に、横浜市立大学でも文部省に科目申請したのですが、その時に「読書と豊かな人間性」という科目名は大学の科目名としてはおかしい、と。せめて「読書指導論」とか「読書教育論」とか、そういう科目名に変えさせてほしいと交渉したのですが、いやこれは司書教諭講習の科目に相当する科目を大学に開いているのだから、科目名を変えてもらっては困ると言われて、しぶしぶこの科目を開講しました。余談ですが、後に青山学院大学に頼まれて非常勤に行きましたら、そこは「読書教育論」という科目名になっていて、私の政治力が足りなかったのだなあとかガッカリした覚えがあります。前後しますけれど、科目変更の前に高鷲忠美先生から、放送大学で司書教諭講座を開設するのでその非常勤、というか講師を、ということで、当初は「図書館資料利用論」という形で利用指導に関わる部分を、今は青山学院女子短期大学の堀川照代さんと一緒に担当することになりました。読書指導の部分は増田信一先生、当時は奈良教育大学だったかな、になっていたのですが、科目が変更されて利用指導と読書指導と分かれることになったので、私がちょっと先輩なものですから、堀川さんにどちらを担当したいですかと尋ねたら、堀川さんが私は利用指導の方を、とおっしゃったので、しょうことなしに科目変更に伴って「読書と豊かな人間性」の部分を担当することになりました。その後、樹村房の『読書と豊かな人間性』の編集を古賀節子先生からお願いされて、それを担当しました。

それで、現在、横浜市立大学は定年前に退職したのですが、いくつかの大学で非常勤をしています。そろそろいずれも定年なのですが、ただしその非常勤講師を担当しているところ、まあ横浜市立大学でも当然そうだったのですが、「読書と豊かな人間性」の他に「学校経営と学校図書館」、「学習指導と学校図書館」、一年間で3コマ担当するという形になっていますので、授業の聴講生がほとんど重複しています。私の科目を3科目取ってくれている学生なので、この「読書と豊かな人間性」という授業内容は他の「学校経営と学校図書館」、「学習指導と学校図書館」の講義内容をふまえた形になるように考えています。文部科学省の学習指導要領に準拠するという意味での狭い意味の教育学、日本独特の学校教育学の視点ではなくて、図書館学からの視点の講義を意識しているということです。つまり教科書というのは文科省の検定があるわけで、学校図書館はその検定のない、さまざまなメディアを収集するということに意味があるので、そこに図書館学の視点からの専門性を活かしてほしい。これは児童青少年に悪影響を与えるとか、最近のNHKじゃないけれども、政府が右と言っていることを左と言ってはいけないとか、18歳の選挙権が認められたにもかかわらず高校での教育では中立性を求めるとかですね。そういうふうな発想が私はどうも気に入らないので、とにかく子どもたちに何らかの形の進路選択、もちろん投票でもいいのですが、投票の選択をさせるのだったらその選択肢を並べて見せなきゃいけないだろう、原子力発電所推進という意見と反対という意見と両方あるのだということを並べて見せなきゃいけないはずだ、というのが私の基本的な考え方なので、それに沿った講義を心がけているということがあります。特に「学校経営と学校図書館」という講義の中で、図書館の思想史みたいな話を、

科学の発展、民主主義の普及、そして近代教育の成立のためには図書館というものが必要なのだ、とりわけ学校図書館で、私が一番強調しているのは、大学進学率が5割を超えたという現実があるのにもかかわらずですね、大学図書館の使い方というのを高校でまったく教えていない。日本の大学図書館で百万を超える蔵書をもっているところはそんなに多くはないにせよですね、百万冊を超える図書館を使うのはやはり練習が必要なので、小中高と少しずつ大きな学校図書館を日常生活の中で使っていかなければ、大学で卒論を書くことできないだろう。そのトレーニングをさせてほしいというようなことを「学習指導と学校図書館」の中ではかなり重点をおいてお話をしているつもりです。いくつもの大学で非常勤講師をしているのですが、だいたい同じ内容なので、それに共通するものとしてシラバスを示しておきました。いちおう、これもシラバスを出せというから出しているのですが、あんまりシラバスどおりに話をするのは好きではないので、まあ目安です。

シラバス

1. オリエンテーション、「子どもの読書活動推進法」について
2. 子どもたちの読書実態（2015年度調査から）（その1）
3. 子どもたちの読書実態（2015年度調査から）（その2）
4. 現代日本における出版流通の実態と問題点（その1）
5. 現代日本における出版流通の実態と問題点（その2）
6. 人間の発達（development）と読書（その1、読書と人間性の発達）
7. 人間の発達（development）と読書（その2、読書能力の発達）
8. 人間の発達（development）と読書（その3、読書興味の発達）
9. 子どもの発達（development）を支える読書指導のあり方
10. 読書指導の目的と内容
11. 読書指導の方法（その1、特に幼児に対して）
12. 読書指導の方法（その2、小学生を中心に）
13. 読書指導の方法（その3、中・高校生を念頭に）
14. 読書指導と学校図書館における選書
15. まとめ（生涯読書の理想に向けて）

成績評価はレポートの提出による。レポートの課題は「(任意のジャンルと対象年齢とを限定した上で)なるべく多くの児童青少年向け読書材を見つけて比較考量し、学校図書館での選書・集書の是非を検討せよ」というような内容のものである。

ポイント

1. 日本の子どもたちの「読書離れ」「活字離れ」は本当か？
2. 「おおよそ18歳」までを「子ども」とひとくくりにして考えることは妥当ではないのではないか？
3. 「学習指導」と「読書指導」とは切り離して考えてはいけないのではないか？
4. 「司書教諭」の専門性は「選書・集書」の場面においてこそ重要ではないのか？
5. 読書指導が「読書管理」につながる危険性に配慮が必要ではないのか？

実際には、教職を目指すものが上記のような配慮を「実践の場で活かす」ことは困難ではあるが、こうした意識を持つ者が教職を目指してくれるならば、そこに希望の光が見えるのではないだろうか。

- 2 -

最初のオリエンテーションの時間に子どもの読書活動推進に関する法律をやや批判的な視点から紹介をします。2時間目、3時間目と書いてありますが、毎年、学校図書館協議会と毎日新聞社が共同でやっている学校読書調査の調査報告、[全国] SLA のものを使っていますけれども、それをコピーして配布して紹介をします。4番、5番はこの「読書と豊かな人間性」の中で話するのが適切かどうかかわからないのですが、たぶん「学校図書館メディアの構成」では時間がなくて話せないだろうと思うので、私がやっている科目としてはこの科目の中で、現在、日本の出版流通における実態と問題点という話を2時間ほどいたします。それから6、7、8、9は、これは発達ということをふまえたうえで、特に子どもの読書活動推進法の第1条ですかね、この法律で子どもとは「おおむね18歳以下の者をいう」っ

ていう、この18歳以下の者をひとまとめにして子どもという、この発想がとても気に入らないので、発達状態に合わせた読書指導を考えなければいけない。特に小学校の高学年から中学校、高校にかけては、むしろ教育の視点としては、個性化を進める、他人とは違った自分になるということが大事なのに、日本の教育はやっぱりみんな同じという形で子どもたちを取り扱うので、それに対応できるのは検定済みの教科書ではなくて図書館だろう、ということ強く訴えるような内容を心がけています。10、11、12、13は文科省の科目の狙い等で読書指導の方法について特に詳しくというふうに書いてありますから、シラバスに載せないのは具合が悪いだろうということでシラバスに載せてありますけれども、中身はざっと、さまざまな言葉、単語の説明等をするぐらいで、あまり詳しい話はしません。

成績評価はレポート提出に拠るということで、レポートは基本的に聴講生たちに、児童青少年向けの本というものをなるべくたくさん実際に見て欲しいと思っています。ですから通常前期に授業が設定されている場合には、ゴールデンウィークの明けた頃にもう課題を発表しまして、レポート提出までに本屋に行って、公共図書館に行って、なるべく子ども向けの

本をたくさん見て欲しい。それでうちの学校図書館で買うとしたらこの中からこういう基準で、こういう書物を買いたいとか、こういう本は予算のゆとりがないのならば買わないとか、こういうのは予算にゆとりがあっても買わないとか、そういう自分なりの判断をレポートにまとめてほしい、という課題を出しています。大学によりますし、もちろん学生にもよるのですが、だいたい私の要望どおり、かなりの量の本をチェックして、自分なりの判断をしてくれていると思います。

ポイントとして五つ、5点ほど書いておきました。一つは、子どもの読書活動推進法の提案理由の中で日本の子どもは読書離れ・活字離れしていると言われているのだけど本当か？日本の子どもはたぶんよその国に比べるとたくさん本を読んでいるのじゃないか？学校読書調査の経年変化を追っていきますと、テレビの普及、テレビゲームの普及、今、スマホ、ケータイの普及、たぶんそれで大人たちは読書離れだ、活字離れだと言っていると思うのですが、意外とあまり変わってはない。明らかに読書離れだ、活字離れだ、とは言えないと僕は思うのです。むしろテレビが普及し、漫画が普及し、テレビゲームが普及し、ポケモンGOがはじまってね、でも結構、読んでいるのじゃないのかな、っていう気がするのです。だからあまり本読め本読めって言わなくてもいい部分もあるのではないかと、というのがポイントの一つです。

それからもうすでにお話しましたが、おおよそ18歳までを子どもとしてひとくくりにして考えてはいけません。人はみな同じ人である、でも一人一人違う人である、同じでありながら違う、違いながら同じである。これさえわかってもらえたら、教育っておしまいじゃないかくらいに思っているのです、その違うところを意識してほしい。とりわけ日本では子どもの個性化がとりわけ進む中学生に対して、みんな一緒ということばかりを言い過ぎるような気が私にはしております。

三番目、学習指導と読書指導とは切り離してはいけません。いわゆる読み物と情報収集のための読書というのは同じものだろうと思うのです。樹村房さんで書かせてもらった本（朝比奈大作編著『読書と豊かな人間性』樹村房，2002.）の中に入れておいたのですが、私は虫が好きなので、最初は兵庫教育大学だったと思うのですが、夏休みの司書教諭講習、現職の先生方を集めた司書教諭講習だったのですが、その時に自宅にあったその名もむし社という出版社から『世界のクワガタムシ大図鑑』28,000円（水沼哲郎，永井信二著，むし社，1994）という本が出ているのです。ですが、それを毎年、持って行きましてね。これを小学校高学年、4年生、5年生になったら、クワガタムシ大好きって子どもたくさんいるでしょう。これ子どもに見せてあげたいと思いませんか？っていう提示をしていたのです。今はその倍近い46,000円の改訂版風のもの（藤田宏著，むし社）が出されているのですが、ちょっとこれは重すぎて持てないので今日はお持ちしませんでした。

そういう学校図書館、そういうところに子どもたちを引き込んでいく。恐竜の好きな子もいるし、ケーキ作りの好きな子もいるし、その子にとって大事な本に出会える可能性があるのですよね。今言った28,000円の本は2,000部しか刷られていないのですが、これ日本の小学校2万いくつかあるところの5校に1校が買おうって言ったら4,000部売れるのですよね。私のような昆虫マニアが2,000部買うのですから、もう売り切れているのですが、合わせて6,000部にすれば28,000円は半分くらいの値段になりますよね。まあそんなことです。

四つ目にはやはり分類目録の専門性の必要性が現代はかなり小さくなっているのではないかなということ。むしろ、その司書教諭の専門性というところを、最初に申しあげたように、検定というプロセスを経ない本をたくさん選ぶ、集めるということ、そこに皆さんの専門性を発揮してほしい、というふうに学生には言っているつもりです。最後につけたしみた

いなものですが、読書指導がどうしても読書管理につながる、そういう可能性が私は気になるので、そこに配慮をしてほしい。これぐらいのことを学生に伝えられればいいかな。実際には、この科目を取る者は教員免許状を取ることが前提ですから、教員の採用試験等を考えればですね、今、言ったようなことを露骨に言ってしまうと、採用試験に通らないということになりかねませんから、それはふまえたうえで、実践の場でこういうことをちょこちょこつとでも意識していただけたら多少、教育の質が違ってくるのじゃないか。大学で40年講義をしてきて、あまり変わったようには見えないので、そういう意味では年寄りの、なんていうかしら、愚痴みたいになってしまうかもしれないけれども、そういうつもりでおります。70を超えてもまだ一つ二つのところでは来年もと言われてますので、こういう形の話が続けたいと思っております。時間が少しオーバーしてしまいましたが、ごめんなさい。

## 野口久美子「司書教諭科目「読書と豊かな人間性」授業実践報告」

<p>司書教諭科目 「読書と豊かな人間性」 授業実践報告</p> <p>八洲学園大学 生涯学習学部 専任講師 野口久美子 noguchi@yashima.ac.jp</p>	<p>2</p> <h3>自己紹介</h3> <ul style="list-style-type: none"><li>■八洲学園大学 専任講師（2016.4～）<ul style="list-style-type: none"><li>■インターネットを活用して授業を実施する通信制大学。通学せずに司書資格、司書教諭資格を取得可能。</li></ul></li><li>■その他、大妻女子大学、青山学院大学、帝京大学、相模女子大学等で非常勤講師</li><li>■研究テーマは中学・高校の読書指導（教員や司書の読書指導に対する考え方、読書指導史）</li></ul>
--	---

はじめまして。八洲学園大学で専任講師をしております、野口久美子と申します。「読書と豊かな人間性」の授業報告をとの依頼がありましたので、お話させていただきます。まず自己紹介をさせていただきます。かれこれ7、8年くらい専業非常勤講師ということでいくつかの大学で授業を担当してきました。非常勤講師という働き方が自分のライフスタイルにあっていたので、しばらくそのままかなと思っていたのですが、ご縁がありまして今年の4月から八洲学園大学の専任講師になりました。八洲学園大学は通信制の大学で、一切通学することなく司書資格と司書教諭資格を取得することができるという大学です。本務校でも司書教諭資格は出していて、そちらの話は今日はしませんが、そういう大学に勤めております。

今日は、非常勤先の「読書と豊かな人間性」の実践をお話しさせていただこうと思います。私は読書指導を専門にずっと研究しております、最近は特に中学や高校の先生方が読書指導に対してどのような考え方をもって実践されているのか、ということ質問紙調査やインタビュー調査を通して明らかにしていくという研究をしております。

### 実践の場

3

- 大妻女子大学「読書と豊かな人間性」
  - 2009年～
  - 受講者4～10名程度
- 青山学院大学「読書教育論」
  - 2015年～
  - 受講者20～35名程度（1コマあたり）

今日、お話をさせていただく「読書と豊かな人間性」の実践ですが、一つは大妻女子大学の「読書と豊かな人間性」の授業です。こちらは2009年から担当させていただいていまして、少人数授業です。今年は4名、去年は12人くらいいて、年度によって変動があります。かなりゼミっぽい感じで大妻の方は授業をやっています。もう一つは、去年から青山学院大学で「読書教育論」を担当させていただいております。前任者である朝比奈先生が今回いらっしゃるという

ことで、今日はプレッシャーを感じながら来ました。こちらの方は2コマ連続で担当しておりまして、学生が入れ替わるという形で1コマあたり20～35人くらいの受講者がおります。

### 担当者としてのスタンス

4

- 野口が担当する「読書と豊かな人間性」に関しては、司書教諭養成というより、教員養成課程の専門科目的な内容になっていることは否めない。
- 読書指導は教員一人ひとりが考え、対応していくべき課題である（司書教諭の専売特許ではない）
- しかし、教職課程で読書指導について考える機会はほとんどない。

具体的な実践内容をお話する前に、私がどのようなスタンスで「読書と豊かな人間性」という授業を担当しているかということをお話させていただきます。私は、「学校経営と学校図書館」「情報メディアの活用」も他の大学では担当しているのですが、「読書と豊かな人間性」に関しては、司書教諭がどうこうとか、司書教諭としてこういうふうな読書指導をしていきたいと思います話よりかは、どちらかという教員養成課程の専門科目的な内容になっていることは

否めないかなと思います。まったく司書教諭がどうこうという話をしないわけではないのですが、どちらかと言うと一教員として読書指導を学校の中でどう進めていったらいいのかとか、どういうふうな読書というものを考えて指導をするというのかということを考えてもらう授業になっております。

読書指導というのは司書教諭が一人で実践してもなかなか上手くいかないものだと思うのです。教員一人ひとりが考えて対応していくべき課題だと思っていますので、司書教諭としてどうこうという以前に、やはり一教員として読書というのをどう捉えてどう実践していくべきなのかというのを考えてもらう必要があると思っています。そういうふうな考えでやっています。あとは、教職課程でも読書指導について考える機会がなく、国語科の教免を取る学生でも読書の話は教職課程ではあまりされないということも聞きますので、それであればやはり「教員として」というところでまずは考えてもらう必要があるのではないかなと思って、そういうふうなスタンスで授業を行っています。

## 授業のねらい (大妻 シラバスより引用)

5

- 近年、子どもの読書活動を推進する取り組みが活発に行われています。特に学校で行われる読書指導は重要視されつつあります。ただし、本来、個人的な行為である読書を指導することや読書指導の方法（読書感想文など）については、さまざまな意見があります。この授業では、子どもの読書活動を取りまく現状や学校教育の状況を踏まえ、読書指導のあり方と司書教諭の役割について、講義やディスカッション等を通して考えを持てるようにします。加えて、実際にブックトークを実践することで、発達段階に応じた選書や本の魅力が伝わるプレゼンテーションの方法を体験的に習得していきます。

## 到達目標 (大妻 シラバスより引用)

6

- 読書指導における司書教諭の役割について、自分の考えを説明できる
- 読書指導の代表的な方法について、概略、実践例、課題となっていることを説明できる。
- 発達段階に応じた選書について、具体的な例を出して説明できる
- 本の魅力を伝えるためのプレゼンテーションを実践できる

「授業の到達目標」ということで、読書指導における司書教諭の役割について考えを説明できる、読書指導の方法について説明できる、発達段階に応じた選書について説明できる、の三つを目標として掲げております。

## 授業の運営方針・ねらい

7

1. 読書指導に答えはない
  - 「なぜ学校で読書指導を行う必要があるのか」
  - 上記の問いに対し、(人間性という言葉を使わずに)自分なりの考えを説明できること、読書指導が必要と考える場合、どのような方針で、どのような方法を用いることができるかを述べられるようにする→グループディスカッション・講義
  - 担当者自身の考えは述べるが、それが答えではないことを繰り返し強調する。

授業の運営方針としては考えていることが二つほどありまして、一つは読書指導には答えはないということです。人それぞれに読書指導に関して答えがあっているのじゃないかというスタンスで基本的には授業を行っています。私の授業は、なぜ学校で読書指導を行う必要があるのかということを考えてもらう授業として構成していません。全体を通してですね、ディスカッションなんかをやりながら、なぜ学校で読書指導を行う必要があるのか、そもそも本を読

む必要があるのかどうか、そういうことを考えてほしいなと思ってやっています。授業の初回にも「私は読書については教えられるけど、人間性についてはよくわかりません」と学生には言うのですが、人間性という言葉を使わずに、なぜ学校で読書指導を行う必要があるのかということの答えを説明できること、ですね。そのうえで読書指導はやっぱり学校でやる必要があるよねというふうに考えるのであれば、どのような方針でどのような方法を実践することができるかということ、それぞれの考えで述べられるようにしてもらいたいことを一つの目標としていまして、ディスカッションですとか講義を通して考えてもらえるようにしています。その時、「授業中には私の考えも伝えるけれど、それは答えではないですよ」ということも繰り返し強調します。今の学生は素直なので、私が何か言うとそれが答えだと思ってしまうのです。なので、私の言うことは答えではありません、私は結構いい加減なことを言います、なので疑ってかかってくださいとかなり強調して言います。私はこう思うけど皆さんどうですか、という感じでですね、話をしています。

## 授業の運営方針・ねらい

8

### 2. とにかく本に触れること

- 教員が読書をしないのは言語道断
- 学生は割と読書はしているようであるが、子ども向けの読書材に触れる機会は少ない。
- 少しでも読書材を知ること、図書館に足を運ぶこと→ブックトーク課題

あとは図書館に足を運んでもらうことを実際に実践してもらうためにブックトークの課題を学生に課しています。

## 授業内容

9

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子どもの読書の現状とその背景</li> <li>・ 読書とは？ 読書指導の変遷（日本／海外）</li> <li>・ 学校における読書教育の現状（ゲストティーチャーによる）</li> <li>・ 読書指導の方法（アニメシオン、リテラチャーサークル、読み聞かせなど）</li> <li>・ 特別なニーズを持つ児童生徒への読書支援</li> </ul>	講義
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子どもにとっての読書とは、学校に読書環境を構築する意義とは</li> <li>・ 読書感想文指導の課題</li> </ul>	グループディスカッション
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ブックトーク課題               <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 構想→単元・テーマの決定→本の選択→シナリオ（指導案）作成→プレゼン準備→発表→振り返り</li> </ul> </li> </ul>	個人活動 (場合によってはグループワーク)

授業内容に関してですが、大きくまとめると講義とディスカッション、グループワークという構成になっています。講義のところかというと、まずは子どもの読書の現状ということで、学校読書調査のデータを見ながらどうなっているのかというのを確認するとか、歴史的なことも説明したりとか、この後、お話ししますが、現場の方をお招きして学校でどのような読書指導が行われているのかということをお話していただいたりとか、あとは読書指導の方法ということ

では、アニメシオンとかりテラチャー・サークルといった欧米型の読書教育をですね、ほんの少しですけど、体験してもらえそうな形でやっています。こだわりがあるのだとするのであれば、特別なニーズをもつ児童・生徒にとっての読書支援のところなのですけど、これは「読書と豊かな人間性」に限らず、どの授業でも必ずお話ししています。身内がこの専門だということも関係してはいるのですが、教員になろうがなるまいが、合理的配慮とか特別なニーズをもっている人たちにどういうふうな支援をしていくべきなのかということはとても重要な話だと思っていますので、この辺はどの授業でも必ずお話ししています。こだわりと言えばその辺がこだわりかなと思います。

あとはグループ・ディスカッションということで、2回ですね、課題を設けてディスカッションをしています。グループワークに関してはブックトークを実際に作ってもらって、発表をってもらう課題を課しています。その辺は後で詳しくお話しします。

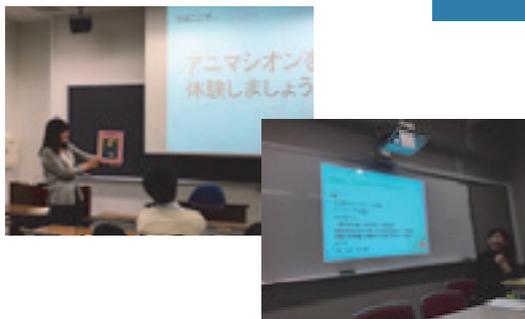
## ゲストティーチャーの招聘

10

- 現場の実態を知る。
- プロの技を体験する（ブックトーク、アニメーションなど）
- 現場の方々に、大学の司書教諭課程でどのようなことが行われているのかを知っていただく。

## ゲストティーチャー

11



その前にゲストティーチャーの招聘ですが、これはまず現場の実態を学生に知ってほしいということで行っていきまして、あとはプロの業を体験してもらうということですね。私は学校現場の出身ではないので、アニメーションなども見様見真似でやりますけど、そこに留まってしまうので、ブックトークですとかアニメーションとかのプロによる業ですね、これを体験してもらう機会としてやっています。また、これは学生には直接関係のないことではありますが、一方では学校図書館現場の方々に、大学でどのような授業が行われているのか、どういう学生が司書教諭課程で学んでいて、どういうことが教えられているのか、ということを知ってほしいなという気持ちがありまして、そういう意味もあってゲストティーチャーの招聘はやっています。大妻には小学校司書の永田美穂さんにお越しいただいています。私は永田さんのブックトークが大好きでして、何が良いかということ、初心者にとってもわかり易い、優しいブックトークなのですね。大妻の学生にはブックトークの実演を課題として課していますので、ブックトークの実演と学校図書館の活動について、お話していただいています。

## グループディスカッション

12

- 800字以上のミニレポートを事前に作成。それぞれ事前に考えたことをもとに、ディスカッションを行う。
- ワールドカフェを採用（青学）
  - いろいろな人の意見を聞くことで新たな視点が生まれる
  - 自身の考えも深まる。
- ディスカッションの成果は可視化する→成果物と個々のミニレポートの内容をもとに、後日リフレクションをする。

ディスカッションに関しては、事前課題を課しています。800字以上のミニレポートを事前に学生に作成してきてもらって、それぞれミニレポートの中で考えたことを基に授業の中でディスカッションを行うという形にしています。

大妻は今年度は4人だったので、みなでわいわいやりながらディスカッションしました。今年度の学生たちは放っておいても自分たちで議論できる人たちだったので、自分たちで考えてきたことを互いに質問し

ながら話してもらって、それに私が適当にちゃちゃを入れるという感じでした。

青学は人数が多いので、ワールドカフェを採用しています。ワールドカフェをやるといろいろな人の意見が聞けるので、自分がミニレポートの中で考えていなかったような新たな視点が生まれたり、他人と考えを闘わせることで自分の考えが深まるということで、これはわりと学生にも好評です。ワールドカフェをやるだけでなく、ディスカッションの成果はその日のうちに可視化してもらいます。どんな感じでやっているかということ、付箋を使って話し合った時のキーワード的なことを書き出してもらって、最後に付箋同士の関係性を図にまとめて、発表してもらいます。その成果物と、あとはミニレポートを回収して点数をつけますの

で、その学生のミニレポートの内容をもとに後日、リフレクションも行います。こういうディスカッションでしたというまとめと、ちょっとだけ私の考えをつけ足すみたいなリフレクションをしています。

<div data-bbox="258 407 502 443" data-label="Section-Header"> <h3>ミニレポート 課題</h3> </div> <div data-bbox="746 378 778 403" data-label="Text">13</div> <div data-bbox="258 490 660 517" data-label="Section-Header"> <h4>1. 学校における読書環境のあり方について</h4> </div> <div data-bbox="271 517 766 591" data-label="List-Group"> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 齋藤孝「読書力是对話力」読売新聞 2010年2月21日付記事</li> <li>■ 柴野京子「本を選ぶこと、本が集まること」『書物の環境論』弘文堂、2012</li> </ul> </div> <div data-bbox="258 629 590 656" data-label="Section-Header"> <h4>2. 読書感想文指導のあり方について</h4> </div> <div data-bbox="271 658 762 732" data-label="List-Group"> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 熊谷一之「一步前へ！学校図書館②：読書感想文はこうしよう」『学校図書館』no.776, 2015, p.76-79.</li> <li>■ 上記文献の他に、最低1点は文献を引用する。</li> </ul> </div>	<div data-bbox="871 396 1225 430" data-label="Section-Header"> <h3>グループディスカッション</h3> </div> <div data-bbox="1356 378 1388 403" data-label="Text">14</div> <div data-bbox="876 452 1388 770" data-label="Image"> </div>
---	--

ディスカッションとミニレポートの課題ですが、1回目は学校における読書環境のあり方について考えてみようという課題を課しています。これはあり方と書いてありますが、どちらかという読書指導のアイディア的なものをたくさん出してもらうという感じです。文献を二つ指定していて、一つは齋藤孝さんの新聞記事「読書力是对話力」で、これは読書というのはコミュニケーションの力を身につけることもできるものなのだよっていう話。もう一つは、柴野京子さんの文献「本を選ぶこと、本が集まること」なのですが、こちらは学校の読書指導というよりかは、学校外での読書環境についていろいろ論じている文献です。学校における読書環境について考える時に、学校の中だけで考えるのではなくて学校の外にもヒントを求めようということで、この柴野さんのも読んでもらって、いろいろ考えてきてもらって、レポートを書いてもらいます。

2回目のレポートは読書感想文指導のあり方についてということで、こちらは結構、学生にはいろんな思い出があると思いますので、それも含めてですね、感想文指導にはどのような課題がありそうか、それについて自分だったらどういうふうにしていきたいかを考えてきてもらいます。読書感想文指導の文献としては、さまざまあると思うのですが、『学校図書館』に掲載された熊谷一之の実践記事を読んでもらって、その他に最低1点、雑誌記事でもいいですし、ウェブサイト記事でもなんでもいいので、文献を引用してレポートにまとめてくださいという形で書いてきてもらっています。

## ブックトーク課題

- 大妻女子大学
  - 自身の教科で行うブックトークを15分間実演する
  - 個人発表
- 青山学院大学
  - ブックトークを取り入れた学習指導案及びブックトークプラン（簡単なシナリオ）を作成し、プレゼンを行う。
  - グループ発表（教免・学年を考慮し、担当者がグループを指定）

のほうで教免と学年を考慮してグループを作って、そのグループでやってもらっています。

最後がブックトーク課題です。これは大妻と青学ではやり方を変えています。大妻は個人発表で、ブックトークを15分間実演してもらうという課題を課しています。青学では実演は課していません。ブックトークを取り入れた学習指導案とブックトークプランーシナリオまではいかない簡単なこういう本をこういう順番でこうやって紹介するというプランーを作成して、プレゼンを行ってもらっています。青学の方は人数が多いのでグループ発表ということで、私

## ブックトークを課題とする理由

1. 自身の教科に読書指導を取り入れることの可能性を実践的な課題を通して考えるきっかけになる（……ブックトークのプロを養成したいわけではない）
1. 自身の教科で活用可能な本を知ることが出来る（教材以外にも使える本が沢山あること、図書館が使えることを知ってもらう）

なという思いでやっています。あとは自分の教科で活用可能な本があるということを実際にいろいろ本を探して知ってもらうということですね。教科書や副教材以外にも使える本は実はたくさんあるのだよということ、図書館というのは案外使える場所なのだよということを知ってもらうということですね。なので、なるべく公共図書館に足を運んでほしいということをお話してやってもらっています。

なぜブックトークを課題としているのかということ、まず自分の教科に読書指導を取り入れることの可能性をこういった実践的な課題を通して考えて欲しいなという思いが一つあります。私はブックトークのプロを養成したいわけではありません。ブックトークを上手くなってもらいたいわけではないのです。教員として何か本を紹介するとか、読書指導を取り入れるということはこの課題を通して、どういうふうに分担たることができるのかということを考えてほしい

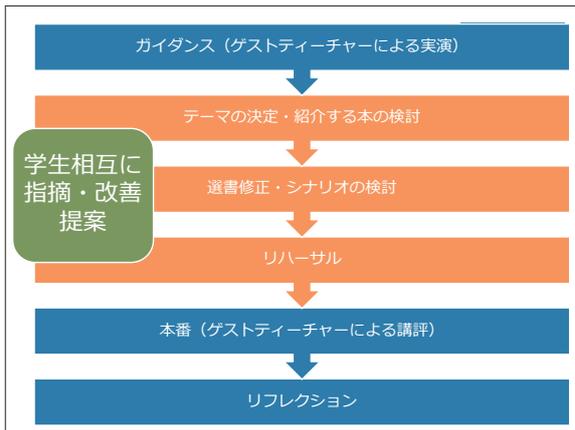
## ブックトークを課題とする理由

3. 探究学習のプロセスを体験することが出来る。
  - テーマ設定、情報収集（本の選択）、情報の精査、プレゼン
  - 「ブックトークって「読書教育」にとどまらない立派な探究型学習じゃん！」と思いました。だって、テーマ設定→情報収集→まとめ→発表→振り返りのプロセスがある！」（JLA学校図書館部会第39回夏季研究集会の参加者の感想より(注1)）

(注1) 高橋恵美子「学校図書館員の専門性を探るPart3：読書を探る（日本図書館協会学校図書館部会第39回夏季研究集会）『図書館雑誌』vol.104, no.11, 2010, p.741-745.

あとはですね、何年か実践を積み重ねて途中で気づいたのですが、ブックトークは探究学習のプロセスを体験できることができる、とても優れた課題だなと思っています。なぜ気づいたかということ、スライドのこの発言「ブックトークって「読書教育」にとどまらない立派な探究型学習」ですよということなのですね。テーマを決めて、本を選んで、その本の情報を精査して、どの部分をピックアップして紹介するかを決めて、プレゼンをしてもらうという、これはまさに探究学習だなあというふうに思っていて、そういう探究学習的なことをこれまで体験してきていない学生もいるので、課題としては良いかなと思っています。

あとはですね、何年か実践を積み重ねて途中で気づいたのですが、ブックトークは探究学習のプロセスを体験できることができる、とても優れた課題だなと思っています。なぜ気づいたかということ、スライドのこの発言「ブックトークって「読書教育」にとどまらない立派な探究型学習」ですよということなのですね。テーマを決めて、本を選んで、その本の情報を精査して、どの部分をピックアップして紹介するかを決めて、プレゼンをしてもらうという、これ



ブックトーク課題の流れとしては、まずはガイダンスということでブックトークはこういうものだよと説明して、いついつに何分間で実演してもらうからということの説明して、同じ時期にゲストティーチャーをお招きして、大妻の場合はですね、学校司書の永田さんに実演してもらっています。見ていただいているスライドの黄色のところがブックトークを発表するまでのプロセスなのですが、テーマを決めて、紹介する本をいくつか選んできてもらって、それを

授業に持ってきてもらって、学生同士でなるべく、この本はこっちのこういう本にした方がいいんじゃないかとか、こういう本もあるんじゃないかということをお互いにディスカッションながら改善していくというやり方でやっています。これを受けて、選書を変えてまた持ってきてもらって、次は簡単なシナリオですね、完璧じゃなくてもいいので簡単にどういふ本をどういふ順番でどういふふうで紹介するのかというのを考えてもらって、それもまた学生同士でどういふふうにしたらいいというのをディスカッションしてもらって、簡単なリハーサルをやって、いよいよ本番ということで発表してもらいます。本番の時もゲストティーチャーをお招きして、大妻は永田さんにお越しいただいて講評をしていただきました。青学は中学校の元司書教諭の方と小学校の現役の学校司書の方をお招きして、それぞれ中高と小学校の視点、それから学校司書と司書教諭の視点ということで講評していただきました。そして発表後には必ずリフレクションをするということですね、そういう流れでやってきました。



これが青学の学生が実際に作ったプレゼン資料と学習指導案ですね。学習指導案はテンプレートがありまして、それに従ってまとめてもらっています。



こちらは大妻の学生のシナリオですね。シナリオは台詞を全部書き出してくださいという形でこういうふう書き出してもらって、あとはブックリストも作ってもらっています。ブックリストはお任せで、A4一枚で自由に作ってもらっています。

21

### 課題

- 読書指導の意義や必要性をとことん考えることにフォーカスしているため、指導計画の立て方や司書教諭として読書指導にどう貢献するか? という点は弱いかもしれない。
- 読書と発達、公共図書館との連携などの説明が抜け落ちている。
- 選書の指導の難しさ
  - 授業内で助言はするものの、最終的には受講者がどこまで貪欲に本を見つけ出せるかにかかっている。
  - 読書記録(読書ノート)はやってみたが...
  - 学校図書館の実際の蔵書で選書が出来るといいが...

最後になりますが、私が担当する授業に関して感じている課題ですね。最初にもお話しましたが、司書教諭課程の授業ではあるのですが、どちらかという司書教諭としてどうかという以前の段階、一教員として読書指導にどう取り組んでいくのかというところにフォーカスして授業を組み立てていますので、どうしても学校全体の読書指導計画の立て方はどうしたらいいのかとか、司書教諭として読書指導に学校内でどう貢献していけばいいのかという点は弱

いかもしれないなと思っています。もう一つは、今回のプレゼンを作っていて気づいたので、読書の発達の話が抜け落ちています。去年までは話していたのですが、今年は抜け落ちてしまいました。ただブックトークの課題の中で、発達段階に応じた選書に関しては実際に本を選ぶ過程で適宜指導していますので、その辺で満たしているとは思いますが、読書能力の発達ですとか読書興味の発達の話は抜け落ちているなと思います。ブックトーク課題に関してはやはり選書の指導が難しいなと思っていて、後ほど朝比奈先生にうかがいたいなと思っているのですが、ブックトークで紹介する本の候補を持ってきてもらってアドバイスはするものの、やはり最終的には学生がどこまで貪欲に本を見つけ出せるかにかかっています。それゆえ、発表の内容に差が出てしまっているなと思います。学生が実際にどのように本を選んでいるのかを探るために、去年は読書ノートをつけてもらったのですが、毎時間はチェックできないのですよ。結局、1ヶ月に1回しかチェックできず、読書ノートをやってもあまり意味がないなと思ったので今年は止めてしまいました。理想としては学校図書館に直接出向いて、学校図書館の蔵書で選書できるといいのですが、なかなかハードルが高くて難しいなと思っています。以上です。ありがとうございました。

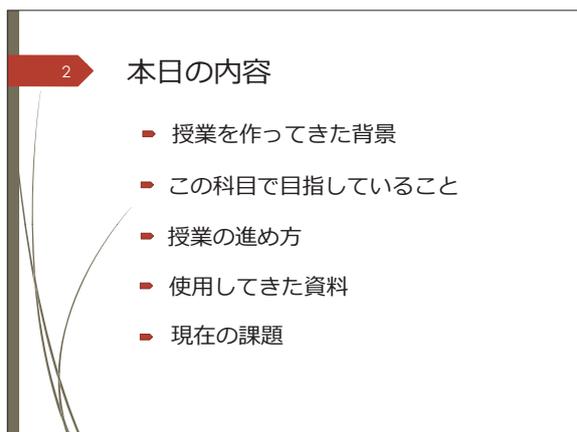
## 平井むつみ「読書と豊かな人間性」の教育実践



滋賀文教短期大学の平井と申します。よろしくお願いたします。私は、元は学校図書館の現場におりまして、その後、滋賀文教短期大学に来まして10年ほどになります。司書教諭の科目は1999年からいくつかの大学で関わってまいりました。ということで、はじめさせていただきます。よろしくお願いたします。

この「読書と豊かな人間性」という科目なのですけれども、この科目は2001年から16年ほどに渡りまして六つほどの大学で担

当させていただいております。今日、報告させていただきます授業内容は、だいたい10年前には形が決まった授業になっています。それ以降、もちろん内容の追加とか削除とか、そういったマイナーチェンジ、あるいは大学によって受講生が違ふ、一小学校の先生になる学生がほとんどの大学、あるいは中高の先生になる学生が多い大学、司書教諭講習の場合には現場の先生、そういうことで内容は変わってきましたし、それから受講生の人数によって、授業方法は変わってきたのですけれども、基本的なことは変えられてきていないというのが現状なのです。ここ2、3年、変えなければいけないという思いが非常にあります。なぜかということにつきましては最後のほうにお話させていただきたいと思うのですけれども、なかなか変えられない。それは、私がやっています授業がそれほど学生に不評でもない。不評ならそこを変えたいと思うのですけれども、でも決して私自身満足しているわけではなくて、変えるきっかけを今日いただけたらということでこの会を引き受けさせていただきましたので、どうぞよろしくお願いたします。



今日はこういう内容でお話させていただきたいと思ひます。まず今日、報告させていただく授業を作ってきた背景と、それから私が目指していること、現実にどういふふうに進めていくか、そして、使用してきた資料と、今、私が感じております課題、というこの五つの形で報告させていただきます。

## 3 学校図書館との関わり

- 学校図書館の現場で  
同志社香里中学・高等学校 学校司書 1976年～1997年  
同志社中学校 嘱託司書教諭 1997年～2001年
- 司書教諭関係科目の担当  
1999年後期より非常勤講師として大学で講義を担当  
2008年より学校図書館司書教諭講習 講師（京都教育大学）
- 司書教諭課程の担当  
2007年より滋賀文教短期大学にて司書/司書教諭課程を担当

まず、授業を作ってきた背景としての、学校図書館との関わりなのですが、私は25年ほど学校図書館の現場の学校司書、それから嘱託で司書教諭をしておりました。もともと学校図書館に関わったのが、学生のころから子どもの読書に関心がありまして、本当は小学生の読書に関心があったのですが、小学校の図書館には行けなくて中高の図書館に行ったところなんです。そこでやはり中学生、高校生の読書を見てきた、関わってきたということが、授

業にかなり影響しているのではないかなというのが一つ。

それから司書教諭関係科目の担当は先ほど申しましたとおり99年、これは「学校図書館メディアの構成」だったのですが、ご存じのように97年に学校図書館法が改正されて、98年に司書教諭講習規程が改正されて、99年から今の科目で行われているのですが、当時、文科省が担当者についていろいろ大学のほうに言ってきたみたいで、学校図書館というものに関わりがない方を、例えば「学校図書館メディアの構成」なんかで採用したらダメだと言われたということで、私なんか回ってきてなんとなく引き受けてしまったみたいな形で、はじまりました。そこで大学生に読書について話すってことをはじめてして、読書とか学校図書館について何を伝えなければならないかっていうことを今までの経験を振り返りながら考えたってことがあります。それから2008年からは現場の先生方に、これは嫌で嫌でしょうがなかったのですが、京都教育大学ではずっと学生の科目を担当していた関係でお引き受けしたのですが、やはり現場の先生に学校図書館ってものをどのように伝えるかっていうのをすごく考えさせられたということも、「読書と豊かな人間性」の今の授業に反映しているのではないかと思います。

それから最後に、2007年から滋賀文教短期大学にいますのですが、すごく小さい短大で何もかもをやらなくてはいけなくて、司書科目というのも今まで非常勤ではもっていたのですが、司書科目全体を把握するということと、それからもう一つ司書講習をやっておりまして、その事務局の責任者もやらされて、いろんな先生のコーディネートとか、科目の概要やシラバスの校正なんか全部しながら思っていたのが、学校司書の方たちは、これだけのことを学んだ司書の資格をおもちの方が多いいということでした。学校という場に学校司書と司書教諭がいて、そして学校司書の方は司書の資格をもっていられる方が多い中で、じゃあこの司書教諭の5科目10単位の中でいったい何を伝えたらいいのかということや、ずいぶん考えさせられたということがありました。

授業を作ってきた背景

4 科目「読書と豊かな人間性」の担当

佛教大学(非常勤講師)	2001年～2010年
南山大学(非常勤講師)	2002年～2016年(集中)
京都橘大学(非常勤講師)	2005年～2007年
滋賀文教短期大学	2007年～2016年
京都教育大学(非常勤講師)	2014年～2016年
司書教諭講習(京都教育大学)	2011,2013,2015

この科目なのですが、だいたいこういう形で担当してきたのですが、非常に大人数の中で授業を組み立ててきたということがあります。2001 から 2006 年くらいまで多い時にはだいたい 250 人くらいのクラスの中で授業を組み立ててきました。どこでも言えることかどうかはわからないのですが、佛教大学でも、2000 年くらいからだいたい 120 人くらいからどんどん増えまして 2006 年くらいがピークだったと思うのですが、2 クラスに分けて 250 人

と 150 人とか、そんな形の授業がずっと続いていました。この「読書と豊かな人間性」はもってなかったのですが、他の大学、京都教育大なんかでもそういう状況がありました。南山大学でも 100 人はいた、という状況で、いったいどんな授業が読書に対してできるかっていう中で作ってきたということがあります。で、それが今どんどん減ってきていて、だいたい今は 100 人を切ってきているところがほとんどの中で、どういう授業ができるのか、100 も多いとは思いますが、という課題が一つあります。

授業を作ってきた背景

5 地域との関わり

- 井手町 (京都府)
  - 学校図書館支援センター調査研究会議 (2006～2008)
  - 学校図書館ネットワーク会議 (2009～)
  - 井手町子どもの読書活動推進会議 (2014～)
- 京都府教育委員会 山城教育局
  - 山城地方子どもの読書活動推進協議会 (2009～)
- 長浜市 (滋賀県)
  - 長浜市子ども読書活動推進会議 (2015～)

あと、もう一つは私に地域との関わりができたということがあります。私自身の現場の体験というのが比較的恵まれた中で、学校図書館体験であったと思います。予算も恵まれていましたし、子どもたち、中学生、高校生の本を読む力という面でも比較的恵まれていたのではないかと思います。そんな中で普通の公立の学校の先生や様子を知り、そういったところと関わる中で、そういう状況の中でいったい学校の読書活動というのがどうあるべきなのかを考

えるようになりました。例えば、調べ学習を小学校 3 年生です。そしてこの本に載っているよと渡してもその本が読めない、決して小学校 3 年生にとって難しい本ではないのに読めない。仕方がないからこのページに載っているよと見せても、抜き出せない。国語辞典で片っ端から言葉を引きながら、もう時間がかかって仕方がない。とかそういう話を聞くようになってきました。そんな中で、じゃあ、その子たちの本を読むことはどうなのだろう、朝の読書とかはどうなのだろう。そのことと、いわゆるそういう本(調べる本)を読む力というのはどのように関わっているのだろうか、っていうことを考えるようになったということもあります。

授業を作ってきた背景	
6 「読書と豊かな人間性」内容	
<b>司書教諭の講習科目のねらいと内容</b> (文部省1998) <b>ねらい</b> ：児童生徒の発達段階に応じた読書教育の理念と方法の理解を図る <b>内容</b> 1) 読書の意義と目的 2) 読書と心の教育（読書の習慣形成を含む） 3) 発達段階に応じた読書の指導と計画 4) 児童・生徒向け図書の種類と活用（漫画等の利用方法を含む） 5) 読書の指導方法（読み聞かせ、ストーリーテリング、ブックトーク等） 6) 家庭、地域、公共図書館等との連携	<b>使用テキスト</b> 『読書と豊かな人間性』（司書教諭テキストシリーズ04）朝比奈大作編 樹村房 2002.9 174p ¥1850 第1章 現代における読書の意義 第2章 学校教育における読書 第3章 発達段階と読書 第4章 読書指導の実際 第5章 読書指導の方法 第6章 生涯学習への読書 第7章 読書材の選択 第8章 読書活動における司書教諭の役割 第9章 子どもの読書

このころまだテキストがあまり出ていなかったのですけれども、2002年の9月に先生のテキスト『読書と豊かな人間性』（朝比奈大作編，樹村房，2002）が出まして、それ以降このテキストを使わせていただいております。この「ねらいと内容」、まだ文部省だったと思うのですけれども、の中のことが本当にちゃんと入っていて、私が飛ばしても教科書にあるので、ちゃんと読んでおいてね、とそういう形でもやっていけるということで使わせていただいております。

この科目で目指していること	
7 この科目で修得してほしい知識	
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 子どもの読書の現状</li> <li>■ 子どもの発達と読書</li> <li>■ 子どもの読書材（含・子どもの本の歴史）</li> <li>■ 子どもの読書に関わる社会の動き</li> <li>■ 読書教育</li> <li>■ 学校図書館とは</li> <li>■ 読書に関わる学校図書館活動</li> </ul>	

それから最後なのですけれども、授業を作ってきた背景の中で、やはりこれは司書教諭の資格に関する科目だということで、いちおう、いちおうなんて言ったら怒られますね、文科省の「ねらいと内容」をチェックしました。テキストは先ほど先生のおもちの、朝比奈先生のテキストをずっと使わせていただいて、さっきおっしゃった、昆虫の話のところはぜひ読むようにというのはいつも言っているのですけれども、最初、99年には先生のはまだ出ていなくて、あ

私自身がこの科目で目指していることっていうのは「知識」と「考えてほしいこと」の二つに分けて考えますと、「知識」としては、やはり子どもの読書の現状を知ってほしい。現状を知るといっても現状は知ることにはできないと思うので、結局は数値で見ることがやはり考えてほしいことの一つなので、これに関しましてはいろいろな統計なんかを提示しています。それからそのバックグラウンドとしての社会背景などを話すこ

とで、子どもの読書の現状というものを知ってほしい。[全国] SLAの学校読書調査とか、文科省の学校図書館調査とか、それから国立青年教育振興機構の「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究報告書」とかから、いろいろな表なんかを抜き出してきて、これをどう考えるかっていうふうなことで考えています。

それから子どもの発達と読書のところは、テキスト以上のことはなかなかできませんので、その時期に読む読書材と組み合わせるとするいう形でしております。その中ではやはり子どもの基本的な本、例えば古典と言われる本がせめていつぐらいに出たのか、どういう時代の中で出たのかっていうことは知ってほしい、子どもの本の歴史も知ってほしいと思っております。

あと、子どもの読書に関わる社会の動きで、これはやはり、文科省やいろんなところから出ているいろんな報告書やなんかも、それをどう思うかっていうこと別として、知っておいてほしいと思うのですね。特に1993年ぐらいからずいぶん、子どもの読書に関する動きがあったと思うので、その辺のころからのいろんな報告書なんかを読んでもらいます。これに一番関心をもってくださるのは、やっぱり現場の先生の授業の時ですけれど、ああこの時

にこういうのが出たからこういうふうに言われたのかっていうふうなことを、経験の長い先生なんかは時々、おっしゃってくださいます。これに関しては、学生さんは興味あるないは半々くらいでなかなかなのですけど、いちおう、知ってほしいということで年表を作りまして、読んでほしい報告書というのをあげてやっております。

それからその次はやっぱり読書教育といわれるものにはどんなものがある、そしてこれは、私の場合はそもそもどういう理念の教育であるのか、あるいはどういうふうにしていくのか、それと意義はどういうところにあるのか、例えば、朝の読書が非常に広がっていますが、本来、朝の読書をなぜやるのか、というところを学校の他の先生方にきちんと伝えられるのか、それをわかってやろうとしているのか。読書教育でもそれぞれの目的も、どういう場合にいいかっていうことは違うと思うので、その理念を知ってほしい、意義を知ってほしいと思っています。

それと、あとは、学校図書館とは、というのはどの科目でもそうなのですが、学校の中にある図書館で、あるいは司書教諭として読書に関わるとしてどういうことなのか、っていうことを考えてほしい。科目を順番に履修してくれてもいいのですが、この科目がはじめてとか、特に「読書と豊かな人間性」の場合は教職関連で司書教諭と関係なく取っている学生も結構いるので、この科目で、この学校図書館とはっていうのはやはり必須かなという気はします。

そして、最後（読書に関わる学校図書館活動）はいったいどういうものがあるのかっていうこと。知識として知ってほしいってというのがこれぐらいです。

この科目で目指していること

**8** この科目で考えてほしいこと

- 子どもにとって読書とは  
子どもの立場で  
教師として
- 学校図書館は子どもの読書とどうかかわるか  
学校の中にある図書館として  
子どもたちの最も身近な「図書館」として
- 自分にとって読書とは

この科目で私が目指していることは何かということなのですが、結局、野口先生とよく似ているのですが、今の子どもにとって読書っていったい何なのかっていうことを子どもの立場で、考えてほしいということと、それから学校で教育に携わっているものとして読書っていうものが一体何なのかっていうことを自分なりに考えてほしいということが一つです。

それから、もう一つは、やはり司書教諭の科目なので、学校図書館は子どもの読書とどのように関わるのかということなのです。

一つは学校の中にある図書館としてどう関わるのかっていうことと、もう一つはやはり子どもたちの最も身近な「図書館」としてどう関わるのか。そのところになかなかしんどい部分が出てくるのですが、やはりそれは考えておかなければいけないのではないかなと思っています。

それからもう一つ、点線で囲んでいるのは、これは学生には直接は言わないのですが、自分にとって読書が何なのかっていうことをこの科目の中で一番考えてほしいという思いがあります。それが考えられるような形で、いろんなことを伝えていきたいと思っています。

授業の進め方

9 15回の授業の内容 (シラバスより)

1. 子どもの読書の現状	9. 子どもを読書に誘う方法 1
2. 子どもの読書をめぐる社会及び 学校の状況の変化	10. 子どもを読書に誘う方法 2
3. 読書について： なぜ子どもに読書を薦めるのか	11. 子どもを読書に誘う方法 3
4. 読書について： 子どもにとって読書とは	12. 子どもの読書を豊かに拡げるために1 読書へのアニメーション
5. 学校図書館は子どもの読書に どのように関わるのか	13. 子どもの読書を豊かに拡げるために2 読書体験の表現、ほか
6. 「図書館の自由に関する宣言」 と学校図書館 (子どもの読書に 関連して)	14. 子どもの読書に関わる司書教諭の活動 家庭・地域・公共図書館との連携
7. 子どものそれぞれの発達段階に おける読書と読書材 1	15. 子どものための読書材： 子どもの本の歴史から子どもの 読書を考える
8. 子どものそれぞれの発達段階に おける読書と読書材 2	

授業の進め方なのですが、これがシラバスです。今まで言いましたことが、どこに何が入っているかということはいくつもなくて、いろんなところに散りばめたりしているのですけれども、こういう形でやっております。学生からの質問などに答えるのに忙しかったり、時間を取ったりなんかして、最後の14、15が一時間になったり、下手したら省略になってしまったりすることが結構あります。集中講義の場合は時間があるので、この15の内容はできているか

なと思います。やり方なのですが、結局、先ほど申しましたとおり200人超えの学生を前にまずはどうするかってことを考えまして、何かやってもらってというのはなかなか苦しいし、小レポートを頻繁に出してもそれに目を通すこと自体が結構、無理だし、いくつかの大学でやっていると500以上を毎週あったって読めないし、っていうことで結局は講義の形に大人数のところではなっていました。

授業の進め方

10 受講生に科目を通じてのテーマを提示

- なぜ、子どもに読書を薦めるのか  
司書教諭 (教諭) としての立場で、  
子どもの読書の意義について自分なりの考えを持つ
- 子どもたちの「なんで本読まんとかんの？」  
にどう納得させる答えを用意できるか

授業はこのテーマを考えるための情報提供

それで、まずは最初にこの二つを学生に提示します。今でもこれはしています。

一つはなぜ子どもに読書を薦めるのか、ってことです。教育者、教員としての立場で、子どもになぜ読書を薦めるのか考えてほしい。そして子どもの読書の意義、今、子どもの楽しみのためのものっていっぱいありますよね、漫画もあるし、それからゲームもあるし、なんでもかんでもあるのだけれども、その中で、でも子どもに読書をしてほしいなら、なぜ今、子どもに読書を薦

めるのかっていうことを、自分なりに考えをもって欲しいと思って、「考えをもってください」と言っています。私自身、いろいろ変わってきましたということも、正直、現場にいた時、それ以降、今もまだ「これや」っていう答えにいきついていないけれども、皆さんが今の学生の段階で、この15回で、このことを自分なりの考えを作ってくださいって言っています。

それからもう一つは、すみません関西弁で、「なんで本読まんとかんの」って子どもたちが聞いた時に、子どもたちに納得させる答えを用意してください、ということです。これも答えはありませんし、私もいろいろ変わってきましたし、これからも変わるかもしれませんが、ただ、今のこの授業の段階で考えておいてください。この授業の目的はこの二つです。そして授業ではいろんなことやりますけれども、このテーマを考えるための情報提供と考えてください、というのを大前提にしています。

授業の進め方

11 授業方法

講義形式の授業の中で、  
主体的な学びを引き出すために

- 科目を通じてのテーマの提示
- 毎回のミニレポートによる確認
- 学生の意見を取り入れた授業
- レポート
- 本の紹介 学生の「読みたい」を引き出す  
—読書を薦められる体験をする—

方法なのですが、講義形式の授業の中で、考えてほしいって何をやるかっていうことで、まずさっきの科目を通じてのテーマを提示して、毎回必ず最後の15分はミニレポートを書いてもらっています。B6版が読めるギリギリなので、B6版で。そしてそこに書くことは、その回に取り扱ったテーマのこともよいし、最初に提示したことで今回思いついたことどちらでも構わない、ということにしています。それで書いてくれたことをできるだけ授業に反映したいと

いうことで、次回にこういう人がいたと紹介しますよって最初から言っておいて、そしてこういうことを言っている人がいます、どう思いますか、これはどうでしょう、っていうことを紹介しています。それから、2回目の授業の時にはミニレポートの題を決めて、今の授業ははじまってまだ2回だけれど、今の段階で、「なぜ子どもに本を薦めるのか」を書いてくださいと、これはきちっと書いてもらいます。その書いてくれたのをもとに3回目の授業は行う、という形が1回と、それから5回目、6回目、「図書館の自由に関する宣言」、「子どもの権利条約」、そのことと子どもの読書に関わるトピックの間にもテーマを決めて、このことについて書いてくださいということで、それを次の授業に活かすということ、それからもう1回、朝の読書を今の学生はほぼ全員どこかでしているの、すべての学生が体験している読書活動っていうと朝の読書かなと思ったので、していた時にどう思ったか、あるいはそれから今、どう思っているかについて書いてもらって、朝の読書に関しての授業にそれを反映させる。もうそれくらいしかできていません。

そして、ちょっと大きめのレポートとしては、途中で1回だけ、これは本を読んでもらうレポートを出しています。今年は絵本にして、とにかくある程度、有名な絵本を知ってほしいっていうことで、指定したリストの中から6冊、それから自分で好きな4冊。読んで簡単な、書評までは行かないのですけれど、書いてもらうのを出しています。

後は、私の隠れた目標であるところの、学生が自分の読書について考えてほしいということで、学生自身が読みたいと思うように、本を推薦というか薦めます。本の内容を毎回毎回、結構、薦めるので、読みたい子は持って帰っていいよっていう形で置いておくと、持って帰って読んだり、あと、あの本読んだってということがレポートに書いてあったりして。要するに、学生たちは先生になったら薦めるほうに回るのだから、薦められる側の体験をしてほしい。それでこういう薦め方はダメだよとか、こういう薦め方されたら読む気になるよね、私の下手な薦め方でも、その思いをもってくれたらそれでいいし、読み聞かせにしても短編を、絵本ではなく短編を、私自身が読み聞かせるのですけれど、読み聞かされるってというのはどうなのだ、どういう気もちがするのか、これは長いよねとか短いよねとか、やっぱり自分で読んだ方がいいよねとか、いろいろ感じてほしいと思っています。ブックトークも、最後の試験でブックトークを作ってもらおうのですけれど、ビデオなのですけれど、ブックトーク、本を紹介される体験をしてもらうっていうことを重要視しています。

使用してきた資料

12 参考資料(1)

学生に内容を紹介した子どもの読書について考える主な資料

図書：『読書はパワー』Sクラッシェン著 長倉美恵子(ほか)訳 金の星社 1996  
『読む力は生きる力』脇明子著 岩波書店 2005  
『本が死ぬところ読力が生まれる』B.サunders著 杉本卓訳 新曜社 1998  
『世界図絵』コメニウス著 井ノ口淳三訳 平凡社 1995  
『本・子ども・大人』P.アザール著 矢崎源九郎(ほか)訳 紀伊国屋書店 1957  
『子どもによる子どものための子どもの権利条約』小口尚子 福岡鮎美訳 小学館 1995  
『子どもとことば』岡本夏木著 岩波書店 1982  
『松居直のすすめる50の絵本』松居直著 教文館 2008  
『読み聞かせ』シム・トレリス著 亀井よし子訳 高文研 1987  
『奔放な読書』D.ヘナック著 浜名優美(ほか)訳 藤原書店 1993  
『子どもたちをお話の世界へ』E.コルウェル著 松岡享子(ほか)訳 こくま社 1996  
『ブックトーク：理論と実践』全国SLA 1990  
『ブックトーク再考』学校図書館問題研究会「ブックトークの本」編集委員会編 教育史料出版会 2003  
『朝の読書が奇跡を生んだ』船橋学園読書教育研究会編 高文研 1993  
『朝の読書実践ガイドブック』林公著 メディアパル 1997  
『先生、本を読んで！』村上淳子著 ポプラ社 1999  
『読書へのアニメーション：75の作戦』M.M.サルト著 宇野和美訳 柏書房 2001  
『読書のアニメーション』佐藤涼子編 児童図書館研究会 2005  
『子どもと楽しく遊ぼう読書へのアニメーション』黒木秀子 鈴木淑博著 学事出版 2004  
『大人のための児童文学講座』ひこ・田中著 徳間書店 2005

次、字が小さいのですが、情報提供だと言った限りは、いろんな人のいろんな考え方を紹介したいと思ひまして、いろんな本を、小説とか物語だけではなくて、いろんなものを紹介します。もっとあるのですが、ここにあるのはだいたいいつも紹介している本です。

使用してきた資料

13 参考資料(2)

学生に内容を紹介した子どもの読書について考える主な資料

報告書等：  
「学校図書館調査」全国SLA  
「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」  
「児童生徒の読書に関する調査研究協力者会議 報告」1995  
「これからの時代に求められる国語力について」文化審議会答申 2004  
「これからの学校図書館の活用の在り方等について」  
子どもの読書サポーターズ会議報告 2009

授業中に使用した主な映像資料  
いい本見つけたpart2 7 ブックトークの館～時間～  
紀伊国屋書店 1995  
図書館の達人 司書実務編 3 ブックトーク 紀伊国屋書店 1995  
ビデオ読書のアニメーション 柏書房 1998  
読書アニメーションってなあに フェリーズジャパン 2000 (一部)  
知と心を育てる読書の教育 第2巻 第6編 読書へのアニメーション 2006 (ほか)

あと、主な資料の、報告書なんかで、どうしても読んでほしいものは、プリントにするのですけれども、読んでほしいところを。それはこういった資料です。

主な映像資料ということで、「ブックトークの館～時間～」。これは古いのですけれども、これを見た後、必ずあの本読みたいこの本読みたいという学生が出るので、これは紹介される、まあ映像を含めたブックトークで実際のブックトークと違うのですが、そういう体験をしてもらおうということで使っています。

現在の課題

14 現在の課題

- 授業方法の検討
- 授業内容の検討  
今までの読書教育の検証と新しい読書教育  
学校図書館をめぐる変化に対応した内容への移行

最後なのですが、現在の課題として、授業方法。一番多かった佛教大学は今も時間の関係で行かせてもらってないのですけれども、以前多かったところ、例えば南山大学なんかでも、今はもう50人を切っています。それと京都教育大学では学生の「読書と豊かな人間性」の授業は2014年からののですが、ずっと「学校図書館メディアの構成」と「学習指導と学校図書館」をもって、やっぱり250人とかそんなのだったのが、ここも今はもう60人くらいに減ってきています。

私の授業自体がそういう大人数というのを前提にしてきたので、もっと違う方法を考えていかなければいけないのではないかと、それと今、大学全体の中で授業方法というものをもっと考えなければいけないということが言われているので、考えていかなければならないと思っているのが一つ。

それから、一番思っているのが、内容を大きく変えなければいけないなあということです。朝の読書が文科省の調べでは90%を小学校なんかで超えるようになってから、ほぼ10年近く経っていると思うのです。それを体験してきた子どもたちが今、大学生になっている。その大学生と10年前の大学生と比べた時に、どうなのかって思った時に、じゃあ朝の読書っ

て何だったのかな、っていうのがすごくあります。

それからもう一つは、「小学生の子は本、本当に好きですよ、もうほんとによく読みますよ」っていうのを大学生からもよく聞きます。ところが中学の先生からは、せめて中学校の教科書を読めるようにして中学校に送り込んでね、っていう声を聞きます。そして、小学校の先生は小学校の時あんなに本が好きだったのに、中学になって、本を読まなくなりますよね、中学は何してるのですか、みたいな言い方をなさることもあります。そういった中で、やっぱり小中高全体を見通した読書教育とか、それから今までやってきた読書教育っていうものを、もう一度きちっと考える時が来たのではないかな、考えなければならないのではないかな、と思っています。

それから今、いろいろ出てきている新しい読書教育。あまり広まっていないのですが、私は読書のアニメーションまでしかまだできていません。リテラチャー・サークル、さっき、野口先生の方からあったのですが、ブッククラブとか、いろんな形が出てきているのですが、それをどのように伝えていくかっていうのがまだできていない。今まで、本は面白いよ、本を読みましょよ、という読書教育っていうのはすごくたくさん行われてきていて、それも大事だと思うのですが、本を読む中身に関わる読書教育というものについて、決してその読み方を教えるのではなくて、いろんな本を読めるようになるような読書教育というものを考えなければいけないのではないかというのが一つです。

もう一つ思っているのは、これは学校図書館をめぐる変化っていうことで、一番大きいのは、やはり学校司書と司書教諭という二職種の中で、司書教諭の科目として読書に関してどうしても知っておかなければならないことって何なのか、っていうことをもう一度、精査したいっていうふうに考えております。これはもう考えだしてから2、3年経つのですが、なかなか大きくは変えられていないのが現状で、ちょこちょこちょこちょこマイナーチェンジを相変わらずやっています。これを機会に変えられればいいなと思っています。ありがとうございました。以上でございます。

(中村) それでは、まずもう少し足してお話しになることがございましたら、いかがでございますか。

(朝比奈) 足すと言うほどじゃないのですが。年寄りの立場から一つだけ言わせていただきます。私が担当していた頃はだいたい30人から、多いクラスで80人くらい、100人を超えることもたまにはあったのですが滅多にありませんでした。したがって若い頃にはグループ・ディスカッションとかそういうチャンスはあんまりなかったのです。それに加えてもう一つ言うと、文部科学省が授業改善みたいなことをしきりに言い出したころから、だんだんエネルギーがなくなってきました。結構、そういう年寄りに向かって今まで30年間やってきたことを新しく変えろってのは難しいよねって、それは自分に対する言い訳でもあるのですが、自分の学生のころを考えてみると、わかりにくくて嫌だった講義の方が記憶に残っていたりするのですよね。授業改善みたいなことに対して、正直むしろ反抗して、あんまり積極的に取り組んでこなかったということがあるのですね。したがって、私は基本的に講義で、専任でいた横浜市立大学では出されたレポートを赤を入れて返却するっていうのはやってました。非常勤の場合にはそれもできないので、学生とのやり取りという点では非常に反省点がお二人の話を聞いていて、かなりやっつけやっつけで、私には欠けてるというのを確認しました。子どもの読書材なんかでも、50代の半ばまでは前年に出た読書調査の上のほうに出てくるタイトルだけでも目を通そうという気はあったのですが、60近くとなるとそれがなかなかできなくなりました。

(平井) 私も最後にちょっと言い忘れました。評価なのですけれど。一つはブックトークを試験で作ってもらいます。本当は前でやってほしいのだけど、こんな人数で無理なので、シナリオを作ってくださいということと、もう一つは、先生方に向かって子どもの読書の意義と、それと司書教諭として読書の何かの活動を提案します、という提案の文書を書いてもらうのですけれど。その提案文書の中に、何を提案するのか、なぜそれを提案するのか、そして子どもの読書というのはなぜ大事なのかという、授業の全体を通じての考えたことが入り込むような形での提案を作ってくださいというのが、試験問題です。すみません、言うのを忘れていました。

(平井) それでは先ほど、野口先生が後で朝比奈先生に聞きたいということをおっしゃったと思うのですけども。

(野口) 私の授業では発達の話が抜け落ちてしまっていて、ブックトーク課題で選書してもらう時にアドバイスしているのですけど、けれど理論的なところが抜け落ちてしまったというのはまずかったなあと反省しています。特に朝比奈先生におうかがいしたいのですが、発達の話をして4回に渡ってされていますが、私は発達の話をして4回分するだけの知識が自分の中にないので、4回をどういうことをどういう資料でお話しされているのかをうかがいたいなあと。平井先生にも発達の話はどのような形で話されているのかうかがいたいです。

(朝比奈) じゃあ、私から、具体的に話しますと長くなりますので。樹村房さんには申しわけないのだけど、私はテキストを使いません。書いてながら、口でしゃべるだけです。一番僕が話したいのは、よくある読書興味の発達の時期と、子どもたちが何を面白く思うのかという、読書材を並べてみると、だいたい、例えば、友達を作って友情という価値観を身につけなければいけないという時期に、友情、努力、正義という読書材を面白いと子どもたちは思う。反抗期になったら自分の自立を考えるので、具体的な自分の将来像を描けるような伝記とかそういうものに興味をもつ。だから大人が読ませたい本ではなくて、その時期その時期の子どもたちが面白い本にいきなれば、それが一番いい読書指導ではないか、というのを少し詳しく話すのです。

せっかくだからちょっとだけ話させていただきますと。私は生物学が半ば趣味なものですから、最初にバイオテクノロジーの話をしてします。乳の出のいい牛を作る時に、予め想定されている、いい遺伝子をもった牛の精子を人工授精させて、その受精卵が卵分割をはじめて、四つになった時に、胎内から取り出して、レーザーメスで四つに切って、4頭の雌牛に着床させるのですね。すると一卵性四つ子が4頭の雌牛からそれぞれ生まれるわけです。つまりこの時点でこの四つの細胞は、完全に同じ細胞なのです。ところが32とか64とかそれくらいに細胞が分かれちゃうと、切ったら死んじゃう。つまり、細胞一つ一つが違う細胞になってきて、同時に違った細胞がその隣の細胞と関係性をもたなければ生きていけない。同じものが違うものになっていく、違っているのだけど実は元は同じでっていう、この違いが大きくなって関係性が複雑化していくのが発達っていうことではないですかっていう話をほとんど1時間するかな。それから読書興味の発達とその発達課題との関係を2回3回という形に、私はしています。

(平井) 私は発達そのものについては朝比奈先生の教科書にあるのを前提として、例えば小学校3、4年生になってくると推理力とかいろんな力が発達してくるというのがあると、この頃に子どもたちは、だから、乱歩とかシャーロックホームズとかを好むと。というのは、そのついてきた力を使うのが面白いから読むのであって、今だったら、はやみねかおるとか、そっちに行っちゃうかもしれませんけど、『都会のトム&ソーヤ』とか、こういう本があるっ

というのを、発達に関しては…テキストを使わせていただいて、そこに書いてあることなのだけれども、今、それに合わせて子どもたちはどんな本を読んでいるのか。中学生になってきたら、恋愛感情を扱ったもの、例えばかつて教科書に『いちご同盟』が載っていたことがありました。そうするとこの『いちご同盟』を、教科書を読んだ子は、そんなこと滅多にないのに、特に女の子たちが予約に列ができるくらい読んだとか。そういうどんな本を読んでいるかっていう、本の紹介を時期それぞれ、小学校のはじめからずっと、こんな本を読んでいるよっていうのを。それと例えば同じ伝記でも小学生は偉人伝を読んでいるけれども、中学校になると身近な同じ時代に住んでいる人の伝記なんかに興味をもつよ、それはこうだから、こんな本があるっていうように。それから[全国]SLAの表がありますよね、[その年の5月に]何を読んだかっていうあの表。あれと照らし合わせたりしながら、むしろ発達に合した読書材を見ていくっていう形で使わせていただいています。

(朝比奈) 私の本では、他の読書教育の読書興味の発達のテキスト、阪本一郎編著『現代の読書心理学』(金子書房, 1971.)を使わせてもらっているけど、少し古いから。

(平井) あれ以降でそういうのって、いろいろ見ているんですけど…

(朝比奈) あんまり大規模なのがないですね。細かいのはいろいろあるけど。

(平井) 70年代ですかね、あれ。

(野口) それもあって、発達についてどの程度取りあげるをすごく悩んでいます。結局、古い研究成果に基づいてしか…私はそれ以上の知識がないので、お話できないと思って。

(平井) ただ、見ていると5、6年生くらいから推理小説を読みだす子とかいて、中1中2くらいまで好きで。なんでしたっけ、若おかみは小学生!シリーズとかばかり読んでいて、で移っていったりしますよね。それを見ていると、子どもの読書自体が、社会の影響も受けているけれども、本来、人間がもつ発達との関わりっていう部分が大きいので、古くてもある程度そうなのかなと思いつつながら、私は使わせてもらってるんですけども。

(平井) もうあまり時間ないですけども、他に何かトピックとかないですか。お聞きしてもよろしいでしょうか、野口先生。ブックトークの先ほどの行程表のようなの、あれは授業でやられるのはどのくらい、授業外で学生がやれるのでしょうか。

(野口) もちろん授業外でも実際に公共図書館に足を運んで本を探してきてもらいますが、だいたい3回から4回分くらいはグループワークの時間を取って、その授業の中で準備を進めてもらうという形です。

(平井) 3回から4回で、あと最後一回発表と。

(野口) それで次回が振り返りです。

(平井) ありがとうございます。

(野口) 一つだけいいですか。朝比奈先生にうかがいたかったのが、レポートに関してなのですが、実際に多くの児童青少年向けの読書材を見て比較してレポートを書くということなのですが、その際の読書材の点数と、実際に学生はどのようなものを選んでレポートを書いてくるのか、というところをうかがいたいです。

(朝比奈) わりあい、本当にバラエティに富んでいまして、私の課題は、対象の年齢をおおまかでよいから区切りなさいと、それから、自分の好きなものがあればそれが一番いいだろうけれど、ある一定のジャンルを限りなさいと。そのジャンルの中で、小学校低学年と絵本というふうな決め方をすると絵本ってべらぼうにあるから、なぜお前は、だいたい2、30点くらいを見る者が多いのですが、なぜこの20を読んだのか、っていう説明がちょっと難

しい。それからジャンルを下手に区切ってしまうと、選ぶものが限られるので、なるべく漏れなく見るみたいな形で探すのがけっこう大変になるよ、と。どちらか、どちらでもいいから選びなさいと言います。茫漠としたテーマを選ぶ人は、今、言ったように、真面目な学生は2、30点見てくれて、その中でほしい半分くらいを自分が推薦するみたいな形になりますよね。もちろんいい加減な学生も多いので、もっと選べるのに10点くらいしか選んでないと、点はガクンと低くなります。別の科目で、ブックトークのシナリオを書きなさいというのをちょっと過去には出したこともあるけど、そちらの方が学生は取り組みやすいようで、ちょっとこの設問は茫漠としているかもしれないですね。

(平井) ちょっと大変。

(野口) では、出てくるレポートの質というのはさまざま。

(朝比奈) さまざま。本当に20点も見てくれて特A、A丸をつけるのから、よっぽどでないし最初っから資格を取っても就職のチャンスはないのだからなるべく資格は認定しようという時代が長かったので、途中からその採点基準を変えるのはなかなか難しかったので、滅多に、というか年に何人か不可をつけるのですが、あまり不可はつけてないのだけど、Cギリギリというのが1割くらいね。特Aはそんなにいないです。

(野口) ありがとうございます。

(朝比奈) 朝の読書の体験をした学生がほとんどだっていう、その違いみたいなのはなんとなく意識されます？経験者と未経験者の。

(平井) いや、それがはっきりすれば、大学生になってですよ。大学生になってははっきりしていればすごく意義を認めるのですけれど、わからないというのが現状です。

(平井) はい。ではいったん区切りたいと思います。ちょっと10分ほどお休み時間を入れまして、15分に戻っていただくということで。その間にアンケート調査にご協力いただければ。

## 質疑応答

(平井) すみません、時間があまりないので。まず、朝比奈先生へのご質問があります。わりとコンパクトにお答えいただけるとありがたいです。

(朝比奈) 「子どもの読書活動推進法に対する批判的視点」というのはやはり、基本的にその読書指導というものを、あの法律の文面から、読書管理につながるような方向性が、どうしても感じ取れてしまうということが一番大きな批判点ですね。非常に露骨に言ってしまうと、第二条に、理念っていうのが書いてあって。「すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう」と書いてあるのだけれど。その理念の実現には学校図書館に予算をポンと出せばそれでおしまいなのに、ちょうどあの法律が出たのは財政の問題が盛んになっていた頃で、金を使わずに読書指導を充実させようという裏が透けて見えるので。金を使わずに子どもに読書指導をするというのは、やっぱり親のというか、大人の読ませたい本を読めという強制的な読書指導に他ならないのではないかと、というのが、一番大きな視点です。

出版・流通の実態は、この日本の「出版・流通の実態」をとりあげる理由というのは、日本の出版流通は、ある意味、世界一だと思うのですよね、過去の十年8万点ほど出ている。それが、毎年毎年8万というわけで。それなのに、実際には、僕らが手に入れることができるという本は、いわゆるベストセラー本でしかなくて、去年の本はもう手に入らないという実態があるので、収集・選書の責任者である司書教諭はどこでどういうものが手に入るの

かというのをきちんと知っておかないと仕事にならない。洋書は別ですよ、古本屋は別ですよ、子どもたちを連れてブックオフに行って本を買わせるっていうのはいいい選書はできませんよ、ということだけは知っておいてほしいというのが理由ということになります。他にもこの方の質問はあるのですが、あまり長い時間をとっても。

(野口) まず、「読書指導の変遷」に関してどの程度教えられているのですか、ということなのですが、小・中学校の読書指導の変遷に関しては自分で一本論文を書いているので、それに基づいて簡単に読書指導というのは、書くこととか話し合うことを中心的な方法として行われてきてというような簡単な流れを紹介して、一方でそこにはいろいろな課題もあって、という話をします。ここで私の考えを少し述べるのですが、日本の読書指導というのは何のために本を読まなければならないのかとか、何のために書かなきゃいけないのかということをはっきりとしないまま行われてきたという点があるのではないのかということの問題提起して、その後、学生にじゃあなぜ読書する必要があるのだろうかとか、なぜ学校で読書指導する必要があるのだろうかということをディスカッションを通して考えてもらうという流れで行っています。というような流れで行っているのですから、読書指導の変遷に関しては情報提供という形で、なぜ読書が必要なのか、読書指導をする必要があるのかを考えるきっかけという形で取りあげています。

(平井) すみません、それに関連してなのですが、「読書指導」と「読書教育」という言葉、どういうふうに使っていらっしゃいますか、という質問があるのですが。

(野口) 厳密には使い分けなくてはいけないとは思っているのですが、ただそこを授業で学生に説明すると、学生がかえって混乱するのではないのかなというふうに思っています。本当はちゃんと厳密に使い分けて説明しなければとらないのですが、あまり使い分けてはいないです。基本的に読書指導という言葉を使っています。

(中村) それはいちおう三人の先生に聞いておきたいです。どうですか？

(朝比奈) 私もこの授業では基本的に「読書指導」という言葉しか使わないので、「読書教育」という言葉はほとんど使っていません。ただ、青山[学院大学]では読書教育論というタイトルだったので、でも、授業中にはほとんど使わなかった気がします。本を読みなさい、あるいはいい本を読みなさいっていうのはやっぱり読書指導だと思うのです。読書教育っていう言葉を使うのであれば、もう少し広く、新聞の読み方であるとか科学書の読み方であるとかいうのも含めて、読書教育論という言葉を使うとすれば、使うべきではないのかなと。

(平井) 逆に私は「読書指導」という言葉を使っていません。「読書教育」という言葉で統一しています。読書指導と読書教育の違いということについては、いろいろあると思うけれども、私はこの授業では読書教育という言葉を使いますっていうことをあらかじめ言って、この言葉を使っています。食い下がられたことがありました、院生の学生に。いや、これは読書指導でしょっていうのを後に来てずいぶんと言われたことがあったのですがけれども、考えたのですが、今は、今はっていうかずっと読書教育という言葉を使っています。

(中村) 増田[信一]先生は、読書教育という言葉をお好きなんじゃないですか。学校図書館関係者一般には、読書指導と言ってきたという、歴史的にはそういうことだと思うのですが、いや、授業のタイトルが教育になってみたり、いろんなところで変わってお三人が使っていたので。そのあたり、私もどう教えたらいいのかとか、研究者同士でもお話して思ったり。「読書教育」と言っていたりして。私は「読書指導」って言っていると、本当に同じことを話しているのかなみたいなこともあるので、このあたり、どうかなと思うの

ですけれども。

(平井) では、野口先生、もうちょっとあるのでお願いします。

(野口) 「積極的でない受講生がいる場合の働きかけはどうされていますか？」あまりいいです。もちろん出来には差はありますけれども。課題は段階的に3回とか4回とか、ここまでやってきてねと指示してやってきてもらっているの、あまり困ったなっていうのは司書教諭課程ではないです。司書課程ではあるのですけれども。司書教諭の学生は基本的に真面目なので、あまり困ったことはなかったです。

(フロア1) あれですか。3年生とかですか。

(野口) 3年生と4年生です。

(フロア1) 学年の問題って大きいと思って。2年生の子ってわりと。3年生の子って教員免許取って来ているので、そもそもそこまで生き残っている子は積極的に生き残っているっていう。

(野口) [“リテラシーサークル”“ブックカフェ”についてもう少し詳しくおききたいです] に対して] リテラチャー・サークルに関しては足立幸子先生の文献を参考にしてレジュメを作っていて、リテラチャー・サークルというのはこういう流れでやるものだというのをまず紹介して、体験してもらっています。『クローディアの秘密』の最初の20ページ位をコピーして、最初のさわりのところだけなのですけれども、こんな感じで役割を決めて分担して読書会をするのだよっていうのを体験してもらったうえで、実際に学校でこういう取り組みをする時には少し気をつけなければいけない点がありますよっていうのを足立先生の文献に書いてありますので、それを紹介する形でやっています。

(平井) はい、ありがとうございます。

(フロア2) リテラチャー・サークルというのは、本を読んで、それについて話し合うものですか？

(野口) そうです。読書会のやり方なのですけれども、ただ自由に話し合うのではなく予め、役割というのを分担して話し合うのですね。その役割に基づいて読んで……役割というのはいろいろあるのですけれども。いいなと思った表現とかを抜き出す係とか、読んだ範囲でイラストを描く係などですね。イラストを描く人は何も言わずに話し合いの時にイラストを見てもらって、これは何のイラストでしょうという形で話し合ってもらう。それがいくつか役割としてあるのです。もともと、アメリカでリテラチャー・サークルというのは開発されたのですけれども、足立先生がそれを日本に紹介されているいろいろ研究されているので、それに基づいて紹介しています。

(フロア2) スペインのサルトさんのアニメーションと後発でフランスからアニメーションが入ってきていますよね。それでフランスのアニメーションは、今のリテラチャー・サークルにすごく似ている内容が多いように思ったのですが、そこら辺の区別がわからないなど。実はリテラチャー・サークルって私は全部わからなかったのうかがいました。私はスペインのアニメーションは好きではないんです。もう少しスペインの枠から入るようなアニメーションよりも、つまり、クローズエンドではなくオープンエンドのいろいろなアニメーションをしたいと思っています。そうするとフランスの方のアニメーションが面白い。それでそちらのリテラチャー・サークルっていうのがどういうものなのだろう、というのが少しわからなくて質問しました。ありがとうございます。

(フロア3) すいません、ちょっとアニメーションにひっかかってしまって、フランスのほう

でアニメーションって一般的に言うと、読書に関わる社会的活動全体の公共的なアニメーションっていう。今、サルトさんが言ったのはアニメーションという読書の読解力を育成するためのプログラムを助けるもので、対比するのが難しいのかなと私は思ったのですけれど。

(フロア2) もともと、サルトさんのアニメーションが入ってきた時に例えば岩辺 [泰吏] さんなどが中心になって学校ですごく先生方がなさっていた時に、ちょっとこう「答えを見つける」っていうのに抵抗があった。もちろん、サルトさんは、「自分の提案するアニメーションは教育的なものではなくて、点数ではない」とは言っていますが。でも学校でのアニメーションはまさに「勝ち組負け組が出るだろう」っていうのと、子どもたちもアニメーションに対する読みをしてしまう。どうしても子どものほうで「これはアニメーションだから読むときにこれをすればいけない、こうしなければいけない」というのがあるだろうという気持ちがあって、あまり好きではなかったのですよね。おっしゃっていたように、フランスでは元々アニメーションは社会文化的活動ですから、アニメーターとか専門の部署がいらっしゃいますよね。その中で辻 [由美] さんが公共図書館でアニメーションを、アニメーターがやっている、それを抽出して本で紹介している。その中では「本」を題材にした取り組み、すごく広い意味で言うと、「ブックトークもストーリーテリングも全部、アニメーションです」、みたいなことが書かれている。アニメーションはいわゆる、「本を使った魂の活性化」なので、その中には、ディベート型の「本」を使ったオープンエンドのアニメーションのようなものが存在している。フランス全体のアニメーションとサルトさんのアニメーションを比べるつもりはないのですけれど、フランスの、「アニメーション」の活動の中で「読書」をターゲットとしてやっているアニメーションにちょっと注目はしていて。私もアニメーションを少し [授業で] やっているのですけれど、スペイン型よりもフランス型だと思うのですよね。ディベート形式でやる方。もちろんサルトさんのアニメーションにもディベート形式のものもあるのですけれども。それでリテラチャー・サークルがどういう形のアプローチなのかなって少し気になったんです。

(フロア3) 日本のアニメーションもいくつか分かれているので、多様性とか学び合いとか気づきを大事にするタイプのアニメーションというのもあって、一概に読書へのアニメーションがクローズっていうのと少し違うのじゃないかなって、比較ではないのですが、ただ比較するのならちょっと難しいのではないかなって思ってしまった。

(中村) いや、私もアニメーションを取りあげるのって少し難しいかなと思っていて、その流派じゃないけれど、日本で紹介している人の違いもあるし、私がバルセロナに行った時に現地の学校図書館関係者に聞いたら、え、フランコ時代のあれ、みたいな話になっちゃって、もう全然、その日本での、広まりとのギャップみたいなものを感じたので。海外でのあいつたやり方っていうのはリテラチャー・サークルもいろんなところで、向こうでどういう評価を受けているのかっていうのは、足立先生しか紹介していなければ足立先生のものが日本でどうリテラチャー・サークルが理解されるかになって。私も視野が狭いので、アメリカで見てきたとか、スペインで見てきたとか言っても、それは本当に点みたいなものでしかないのだけれど。特にアニメーションは日本では分かれていろんな形で紹介されているので、よっぽど勉強しないと紹介できないような気がする時があります。

(フロア2) どうしても手をこまねいているところがあるのですよね。だからあの。

(中村) 私の、私のアニメーションではないけれど、日本の翻訳している人が独自に解釈して。でも翻訳ってそういうものじゃないですか。やっぱり、現地でされている、書かれていたものっていうのをやっぱり解釈しないといけないと思うので。その中でいろんな差別化がされてきてやむをえないと思うのですけれど、私は不勉強だからか、わかっているわけでも、どれが一番良いとか確信があるわけではないので、どういう語り口で紹介したらいいのか。

(平井) アニメーションなのですからけれども、私もどういう形で紹介するのか、すごく悩んでいて、結局、いちおうの概念だけは話して、その後、スペインのビデオ、ありますよね、字幕のついた、柏書房のですね、それを見せるのと、それから、私のスライドの「参考資料(2)」の映像資料の、『読書アニメーションってなあに』に入っているの渡部康夫さんのアニメーションと、「知と心を育てる読書の教育 第2巻」の国立教育政策研究所の有本秀文さんのアニメーションの三つ見せて、どう思うっていうのを書かせています。三つ全然、雰囲気違って、どう思うかっていうのを、学生によってこれが良かったとか、あれが良かったとかっていうのをやっています。

(中村) アニマ、魂の活性化とか広い意味(一般名詞)で使うなら違いますが、スペインで固有名詞で言うと、[アニメーションは] フランコ時代に出てきたものなので、フランコ時代に出てきたものは基本的に否定的なバルセロナの人たちと話してみても、スペイン本国、原文でも評価されているのかよくわからなくなって、結構、アニメーションの話って難しいなって思いました。

(フロア3) ごめんなさい、アニメーションの話ばかりずっとするつもりはないのですが、アニメーションは7条の作戦の中にいろいろな作戦が書いてあるのですが、教室の中でやるのには限界があって、どうしてもアレンジしないと学校教育の中で取り入れにくいという問題点があるのですよね。そうするとそのアレンジ前に本来そのアニメーションで重視すべきポイントであったようなものが抜け落ちてしまったりとか、そういうことがたまにあると。そういう問題点もあるのではないかなって感じがします。そういう時に学校の中ではなかなかできないということがあると思います。すみません、それだけ。

(中村) アニメーションって学校の教師に彼らになっていくとしたら、それを使って、どういう時間を使って、それを実際に実践するっていうふうに考えていくのですかね。ブックトークを授業案に入れてくださるっていうのは学生の間ですごく思いつくみたいで、「学習指導と学校図書館」のほうでもブックトークを入れてっていう指導案を書いてくる学生がよく出てくるのですが、アニメーションとかもそれぐらい授業の中に入れていくアイデアとか今、いろいろ出されているのですか。

(平井) つい最近なのですからけれども、ある学生がアニメーションの話をした直後に言っていたのが、学校でそういえば教育実習に行った時に、ダウト読みやっていたって言うのですよ。それで、え、それ何って言ったら、「絵本を読んで先生がわざと間違わはたら間違ってはるって言う」ような話らしいのですが、僕が本、読んであげるって言ったら、先生、ダウト読みしてって言われた」と。「普通の読みは要らん」って言われたとか、そういうふうにして使うのですかって聞かれて、私一瞬んって。なんか、なかなかどういう形であって、雑誌の『学校図書館』なんかにはよく国語とか古典の授業にこういう形で使ったっていう報告はあるのですけれども、どうなのですかね。

(フロア4) 学生にね、アニメーションを考えさせたことがあるのですよ、上手くいくかなって。面白いのですよね。やっぱり本を題材に、一定のワードでこうアイデアを考え出す、ブックトークで紹介するのじゃなくて、何かこう一冊、テーマ性のあるものとか、そういうものを持ってきて、それを話し合いの中で生徒がいろんな捉え方をすると。生徒が同じものを、学年を別にぶつけて、その結果を比較してみるとか。本を題材にしたいろいろな働きかけっていうのでレポートを出させたことがあるのですけれども。すごく難しかったみたいです。ブックトークのプログラムが枠組みとしてはこうあって、まず本を見つけることがすごく難しく、生徒たちに働きかけて、話し合いの広がりができる本がすごく難しかったっていうふうには。

(中村) いろんな方法を紹介するのがいいのか、なんかブックトークを元にちゃんとやらせるのがいいのか、あるいは自分、私が「読書と豊かな人間性」、ちょっと代理でやった時に、これもあるあれもあるってばばばって紹介していくと、技術としては何も身につけさせられなかったような。

(平井) おそらく、ブックトークとアニメーションでは受ける側からしたら、難しさっていうよりもその活動によって、求めているものが違うので、ブックトークだけでいいかって言ったら、んーって思ってしまうようなところはあります。

(中村) 次々にこれもこれもこれもあるよとか、例えば読みかせと、それからストーリーテリングと、それからアニメーションと、ブックトークとってやろうとすると、私なんかは1回に一こできるかできないか、紹介しているだけ、こっちも一所懸命勉強して終わるっていう感じだったので。どう、先生の方は？

(野口) 私は、読み聞かせと。

(中村) ストーリーテリング。そうするとこの第5回はどういうふうに。ちょっとアニメーションも教えて。

(平井) シラバスで、ストーリーテリングと読み聞かせは、一つの話そのものを伝える、話の面白さを伝える活動として位置づけていて、ブックトークは、ブックトークの他にブックリストとかも入れるのですけれど、読む気にさせる活動というふうに位置づけていますし、朝の読書なんかは実際に読んでみる体験型の活動として位置づけて、アニメーションは読みに関わる活動という、その四つのパターンで主なものを四つあげているだけで、他にも少し触れますが、他にもこういうのがあから自分で勉強しておいてほしいみたいな形でしかできていません。

(中村) だから、野口先生だとブックトークちゃんとをやって深めていくわけですけど、それ、結構、違うなっていうふうに思っていて、私はざっと触れる形で。野口さんの話を聞いたうえで、こういう形でやったことがなかったからこそ、もうちょっとちゃんと、グループ・ディスカッションして、グループ活動で…

(野口) あと、人数が少ないので、っていうことだなと。ブックトークの方法っていう形で取りあげているわけではないのですよね。ブックトークそのものを上手くなってほしいわけでは私は決してないので。自分の授業の中で本を紹介するとか、読書指導をどう取り入れられるかということを実践的に考えてほしいというのと、いろんな本があるよっていうのを実際に図書館に行って足を運んでいろいろ見てほしいっていうことなのですよね。

(足立) あとね、僕の経験では、対象が学生じゃなしに講習の場合、現職の先生方が多いのですよ。それで、小学校の先生なんかは読み聞かせでも、パネルシアターでも、いろんなテクニックをもっておられるので、とにかく自分が日常、試みているものやってみてくださいという形で、準備してもらってやるのです。というのは、こちらが一方的にこういう方法がありますとか言ってやるよりも、実際に日頃からやっている人たちがそれぞれの実践をお互いに共有することによって体験的に、あ、こんな方法もいいなあって感じてもらえるし、お互いに批評もしあえる。現職の先生が多い講習の場合はそういう強みがあるわけですよ。日頃自分がこういうふうにしかやっていなかったけれど、こんなヒントがあるのかっていうことに気づいてもらえるという効果はありましたね。結構、多様な方法が出てきて面白かったです。

(フロア3) 読書のプログラムっていうのがいろいろありますよね、ブックトークとあるように、リテラチャー・サークルとかあるのですけれど、一つさえあれば十分ということではなく、平井先生がおっしゃっていたけれど。たぶんその、読み聞かせだったら安心して聞いて

てられるじゃないですか、でも、寝ちゃう子とか参加できないことも増えるし、そういう子には参加型のアニメーションとか、そういったものはできるとか、やっぱり、その一つのプログラムでまかなえるものっていうのは限られているので、どんな場合にどういう力をつけさせたい時に有効かっていうのはたぶん実施する現場の人間は考える必要があって、いろんなプログラムっていうのをやはりそういうどんなシチュエーションでどんな力をカテゴリーで分けて考えるっていうのは、とっても大事なことなんじゃないかなと。日頃は、現場として、現場の人間なので、やる時は気を遣うのですね。それから、ブックトークなら、学年とか対象に発達段階とか選ばないといけないし、字ばかりの本だと読めないから絵とかも入れておかないとクラス全体に訴えかけるブックトークができないとか。そういう究極は現場で子どもたちを見ながら本を選ぶっていうことが必要になってくると思うのですけれども。その学生さん、司書教諭になる学生さんに、それを現場に行ってやるのよっていう時には、まずその学生さんのほうに探す力がないとすごく難しい。で、そこが、このプログラムを教える時に厳しく見なされることなのかなっていうことをかなりしょうがないかなっていうことを思いました。すみません、感想で。

(平井) そしたら、ちょっと次のトピックにいきたいと思うのですけれども。やっぱりあの、「読書と豊かな人間性」というタイトルに関して書いてくださっている方が結構、何人かいらしたので、朝比奈先生、さっきちょっと触れられていましたけれども、いかがですか？何かコメントというか。

(朝比奈) 最初にこうひっかかったのは、「読書」と「豊かな人間性」を「と」でつないで、どういう意味があるのかというのが非常にひっかかったのですね。これはもう、言うまでもないことなんだけれど、スポーツは体にいいけれどやり過ぎは体に悪いですよね。読書も頭の健康にいいかもしれないけれど、やり過ぎはよくないですよね。だから、決して単純ではない。私が学生にこの授業の一番最初に言うのだけれど、良い授業をすればいい子ができて悪い教育をして悪い子どもができるんだったら、こんな簡単なことはないの。青少年に悪影響を及ぼすという悪い本を読んでそれを心の栄養にできる子どももいるし、できない子どももいるし、悪い影響を受ける子もいるし、毒でも少量なら薬になるっていうこともあるし、決して「読書と豊かな人間性」っていうのが、もとよりイコールで結べないし、かといって不等号でも結べないしね。そういうものだと思っているので、「豊かな人間性」って何なんだっていう話なのです。非常に露骨に言えば、最初の話に戻りますけれど、子どもの読書活動推進法っていう法律を作った人たちがあんまり読書好きな人ではないような。本当に読書好きな人は、あんなこと言わない、人に向かってね。道徳教育も同じでね、道徳を、他人に向かって道徳だ教育だっていうことを言う人は、正直、私はあんまり信用しないという。そういうことで、「豊かな人間性」っていう非常に曖昧な言葉を使って、何かわかったような気になるというのが、私は気に入らない。豊かかどうかは誰にもわからない。

ちょっといいですか、今のアニメーションとかの話の続きになっちゃうんだけど、なぜその読書指導について話さないのかっていうご質問もあったのですが、私はわりあい、ブックトークとブックリスト、高学年にはブックリストになると思うのです。日本の学校教育の中でこの中から選んで好きな本読みなさいっていう指導がほとんどないような気がするのです。そういう意味では読み聞かせもサルトさんのアニメーションも特定のものを子どもに読ませますから、そうではなくて、この中から選びなさいっていうことを、学生が、教える側が言えるためには、その選び方、何をこう並べてこの中から選びなさいって言えば、良い選択肢の提示になるのか、それはやっぱり学生に、ちょっと学生の内にやってみてほしいな、経

験してみしてほしいなっていう気がするのですよね。

(平井) ありがとうございます。

(野口) 私もさっき、少しお話ししたのですけれど、「読書については教えられるけれど、人間性についてはよくわからないので」というのは一回目の授業の時に必ず言います。「この科目は「読書と豊かな人間性」という科目名です。皆さん何か思いませんでしたか？」と学生に問いかけて。学生がたいていぼかーんとするのですけれど……「「豊かな人間性」って気持ち悪くないですか」ということは言います。あとは、私が自分の中で考えているのは、私の授業は「学習指導と学校図書館」の読書版だと思っています。科目名としては本当は「読書指導と学校図書館」みたいな方が…「学習指導と学校図書館」と並べる形であれば、そういう科目名の方がいいのかなあということも考えたりしています。

(平井) 私は最初に、これは文科省がつけた名前です、って言います。その背景にあるのが、この時期、子どもの心の問題っていうのは非常に大きく取りあげられていたっていうのがあって、なんでしたっけ、「新しい時代を拓く心を育てるために：次世代を育てる心を失う危機」とかというような中教審の答申なんかも出ていた時代で、読書が非常に子どもの心と結びつけられて、学校に押しつけられていた時代だった、その時代に決められた科目なので、こういう名前がついたんじゃないかっていうことを社会との関係の流れの中でも触れます。そして、これは私の責任ではありません、これは私がつけたわけではありません、っていうことで、無視して授業はやっています。だけど、読書というものがこの時代に心の問題と非常に強く結びつけられていたという背景、そして、今は2000年のPISA調査以来、言葉と非常に結びつけられている、そういう文科省の流れみたいなことの中でつけられた事態ではないかということで、済ましてしまっています、ということです。

それから、すみません、あんまり時間ももうないのですが、もう一つ、「中高生に対する読書指導について工夫されている点」ということとか、それからもう一つ、「ビブリオバトルについてどう思うか」という質問がありました。

ビブリオバトルっていうのは、滋賀県のほうでは、高校で主に広まっているのですけれど、そこら辺とひっかけていただいて、最後になるかと思うのですけれど、すいません、まだ全部、扱いきれてないのですけれど、中高生に対する読書指導についてということでお願いできますでしょうか。工夫されている点。

(朝比奈) 難しいですね。私は中でお話ししたように、具体的な方法論を学生に向かってはほとんどしゃべらないので、とにかく図書館の仕事を一言で言ってしまうと、利用者のために新しい本を買ってあげることなのだから、何を買ってあげるか、何を買ってあげればいいのかを、考えてほしい。中学生高校生とその学年が上がるたびに、個性というか能力の面でも興味関心の面でも多様性が広がっていくので、その多様性に対応できる本を選んであげなければいけない。そういう意味では、図書館予算を見ると、これは日本の予算が在校生の頭割りであるので、ある意味仕方がないのだけれど、小学校と中学校の学校図書館予算がほぼ同じっていうか、あまり変わらないという現実があって、そういう意味では中学校の読書指導が現実的には、実際には一番難しいですから、それを自覚してくださいねっていう話をするに留めているような実情です。

具体的なビブリオバトルとかそういう話はまずしません。先ほど言ったように、ブックリストを作る作り方を少し意識して、ある意味これが司書教諭の、司書の部分の専門性かもしれないから、意識しておいてくださいっていう程度のことです。

(野口) 今日、改めてお話をうかがっていて、ここ弱いなって思ったのが、まさに段階に応じた方法とか、発達段階に応じてこういった本を薦めていったらっていう部分で。例えば…

ということでお話しすることがあると思うのですけれど、やっぱりその部分が私は抜け落ちていたなっていうのは気づけて良かったのですが。中高生に対する読書指導で工夫しているっていうのは、あまりそこは意識してはお話してはいないですね。こういう方法があるっていうのはいくつか紹介するのですけれど、そののところはあまり意識してお話してこなかったんで、ああ、そういう視点も入れた方がいいのかなと、逆に気づかされました。ビブリオバトルは他の授業でいろいろ紹介されていたりするので、あえて私は取りあげてはいない、という状況です。

(中村) 他の授業でですか？

(野口) 例えば1年生の教養科目とかで、ビブリオバトルやってますという話を学生から聞くので。

(フロア1) プレゼンテーション能力とかなので、図書館じゃないところでやっているのですね、結構、多いですよ。

(平井) 私、ビブリオバトルについては司書課程の授業の中で、図書館行事のほうで、学生がビブリオバトルがやりたいって言って、授業の中で何回かやったことはあるのですけれど。ただ、この科目ではやっていません。というのが、今、おっしゃったように、やっぱり、あれはプレゼンテーション能力っていう意味では、いいのですが、あの5分間しゃべる中で、どれだけ深く読み込んでいるのかっていうのが、ちょっとあんまりわからないところもあって、読み込まなきゃできないものなのかっていうのも、よくわからないところがあって、やっていないのですが。確かにブックトークと一緒に、それを聞くことで、いろんな本を知って、あれ読みたいと思わせられるっていうのは、いいのかなっていうふうには思っています。

私は中高にいて、中高生に対して有効な読書活動っていうのが、これっていうのがなかなかしんどいことは事実ですけど、とりあえずいろんな本をとにかく読みたいと思わせられるように、いろんな本を紹介するっていうこと。とにかく、あっちこっちになんかに引っかけて、廊下であろうが教室であろうが何であろうが、貼ったり、何かに引っかけて紹介するとかコーナー作るとか、そういうことぐらいしか有効なものは、ブックトークとかそういうこと除いたら、今のところないです。

もう一つ中高生で必ず取りあげるのが、ライトノベルの話です。ライトノベルの問題は必ず取りあげています。どう思うかっていうことで、今年、『ソードアート・オンライン』と『ノーゲーム・ノーライフ』を二つ取りあげたのですが、これを、こういう本を読むっていうことの否定は絶対にしないのだけれども、こういう本を読むのと、それ以外の本も読むのと、どこが違うのかっていうことを考えてほしいという、そこまで留まっています。それと、例えばライトノベルなんかでも『キノの旅』のように非常に長くに渡って読み継がれてきたものはどう違うのかと。例えば、『バカとテスト【と召喚獣】』とか、ああいうしばらくしたらあまり読まれなくなってしまったものと、長く読み継がれてきたものとどう違うのか。

それともう一つは、ライトノベルと大人のノベルの中間の、例えばメディアワークス文庫とかのレーベルが結構、出てきている。それをどう考えるのかっていう疑問を投げかけるだけなのですけれども、それしかできないのですけれど、中高生の読書を考える時に、そのところはやっぱり外せないのではないかなと思っています。

(フロア2) とても難しいと思うのが、私、本当は児童サービスを教えている人間で、「読書と豊かな人間性」もいくつか教えているのですけれど、小学生に対する読書の働きかけってどうしても読書の入口なので、「こういう方法があるよ」っていうのは、たとえば読み聞かせだったり、ストーリーテリングであったり、そういうものを授業で教えるんです。ただ、例えば教えている学校によっては、教職課程を取っている子たちが、取ろうと思っている教

職課程が初等 [の免許] ではない子たちがいるのですよね。だから、「読書と豊かな人間性」を取っている子たちにどの教職課程を取得予定なのかを聞いてみると。中高の公民だとか歴史だとかが多い。でも、そういう子たちにも、もちろん下 (初等) から理解しなくちゃ駄目だよって言って、小学生に対する働きかけとかって言うのを言うのです。でもその子たちが実際に教員になって対面するのは中学生や高校生だから、その子 (中高の生徒) たちに対する働きかけとか。例えば本当にラノベの話であるとか、そこら辺がもっと知りたいって言われる。そういう時に、じゃあ私は何ができるのかって言うのは考えてしまう。下 (小学生に対する働きかけ) からならいくらでも話せるのですけれど、児童サービスとの絡みもあるので。中高生って公立図書館になかなかこなくなってしまうので、公立図書館でのアプローチがすごく難しいんです。そのあたりのアプローチを司書教諭に期待したい。学校ってある意味、そこ (学校) に生徒がいてアプローチができるっていうのは公立図書館よりもやっぱりすごく強みがあると思うのですよ。公立図書館に [中高生が] 来てくれなくなっちゃったら、アプローチもできないので。司書教諭としての「読書と豊かな人間性」としての有効なアプローチっていうものが上手く伝えられるといいなって思うのですけれど、なかなか見つけれない。

(平井) 今年、去年かな、やったのですけれども。一時すごく流行った、『スレイヤーズ』っていう、80年代のライトノベルのはじめみたいな本の最初のところをコピーしまして、会話だけでぎゅーと話が進んで行くのですね、ああいうのね。それと普通の物語と並べて、こういう形のをずっと読んでるとどうなのだろうと。ライトノベルっていうのはある一定のお決まりごとみたいなものを読む人がもっていて、それをもとに読んでいるっていうのが多い、今でもそうだと思うのですけれど。そういうのなしで、一から自分で世界を作りあげる読書とライトノベルを読むっていうので、どこがどう…そう思って、上手くいかなかったのですけれどね、授業では、学生がぼかんとしちゃったので、上手くいかなかったのですけれども。その辺のところもやっぱり学生には考えてほしいかなって思うのですけれども。

(フロア2) 難しいのが、子どもの本が好きで教えているのですけれども、ラノベは読めないのですよね、私自身は。だから、本の内容がわかった時点で、これが良いとか悪いとか (選書)、だからこうでしょって説明ができない。私は学生に逆に「このラノベを読んだらいいよ」って私に推薦してくれって言って、何冊も学生に…ラノベが好きなきが何人もいたので紹介してもらおうのですけれど、実際それを読んでも挫折するのです。私自身が面白いと思えないので、価値がわからないと、それについて学生にどうやって伝えればいいのか思路がわからない、伝えられない。

(朝比奈) 同感です。

(中村) 自分が最後まで読めないものについて、語ることもできないから。たぶん、いつもラノベは。でも、平井さんはできているの。

(平井) 結構、読むのですけれどね。

(朝比奈) 私は読まないから、ほとんど読んでいないと言ってしまおう。

(フロア2) むしろ「あなたたちが中高生に近い年代なので、[ラノベの] どうしてそこがいいと思うのか、私に教えて」みたいな形で今、授業をやっているのですけれど。

(朝比奈) 読書指導の高まった時期を考えると、やっぱりテレビが登場してね、週刊漫画が登場して、それから携帯、テレビゲーム。新しいメディアが出るたびにそれに対応できない大人が読書指導って言いたがるような気がする。だから、最近、ようやく漫画評論みたいなものも出てきたけれど、まだそのケータイ小説とかライトノベルとかには評論が出ていな

いから、高校時代、中学時代読んだのだったら、ライトノベル評論を書くつもりで、せっかくだから10冊、20冊読んで選書を考えてみる、っていうような問いかけをしているつもりです。

(平井) 今、ちょっと出てきましたね、ライトノベルに関していろいろ。青弓社とかから出ているのですけれども。そうですね、ライトノベル、でももうボカロ小説になったら私も全然、だめです。

(フロア2) だからやっぱり、教える側として、中村さんもおっしゃったのですけれども、評価すべき本を最後まできちんと読めないっていう、つまり、わからない(読んでいない)ものを良いとか悪いとかって言えるのか、っていうのがすごくジレンマがあって。

(中村) 漫画だって、それでも読めばいいみたいな、漫画だって漫画リテラシーがあって今の学校で読めない子がいるっていう話で。それでもいいから読んでくれればいいって話なのでしょう、要するに。そういうライトノベルとかって。でも、だからそれが段階的に本当に次の読書に行くのかとかっていうのも、学生とかと議論したことがありますけれども。

(平井) 漫画を読む時に働かせる力と、それからライトノベルをぱぱぱと読んでいく時に働かせる力と今までの普通の本を読む時に働かせる力が、どこか違うところがあって、私たちが学校という範囲内で求めている、読書に求めているのが、やはり普通の本を読む時の読む力だったとしたら、漫画も良いしライトノベルも良いけれども、それだけでいいのかってところが、やっぱり、んんっと思うのですけれども。えっとすいません、時間ですよ。

まだちょっといくつかできていないのですけれども、はじめると長くなりそう、どうしてもこれだけはっていうのがありましたら言っていただいた方がむしろいいと思いますので、言ってください。どうでしょうか、何かこのことっていうのがありましたら。

(フロア1) カバーしておかなくちゃいけない範囲が大きいと思うのですけれども、「学校経営と学校図書館」とかで。教育学で図書館を押さえておけば、だいたい説明できるのですけれども、さっきの発達の話ですけれども、心理学の話、社会的な社会学的なところも全部、押さえておかないといけないというところで。正直、これ教える、「読書と豊かな人間性」はもてないのですけれども、これ本当。基礎教養がないと語れない科目だと思っていますよ。それがすごく怖いなって思います。かつて朝比奈先生の授業を聴いていて非常に楽しかったのが、正直、「読書と豊かな人間性」いう名前なのですが、話の広がり方がすごく幅広くて、たぶんその教養の中でお話しされる。だから、図書館には押さえなくちゃいけないところが山ほどありますよねっていう印象をもっているのですけれども、いかがでしょうか、最後に。

(朝比奈) いや、まあ逆にこの科目は文部省の言っているとおりによればそんなに難しいことではないので。

(フロア5) 出版との関係性なんかも非常に大事。図書館とか読書とか、[朝比奈]先生がおっしゃったようにいろんな意味でね、そういった関係性も含めた。朝比奈先生の哲学的な思考も私は大好きなのですけれども、こう非常に広範な知識とか人間に理解がないと教えにくい科目だとは思いますが。

(平井) あの、それと関係してなののですけれども、私、指定するのです、この教科書を。使わないです、あんまりごめんなさい、使わないのですけれども、読んでほしいと思って出版のこともそうですし、クワガタのところでも、とりあえず授業では使わないけれど読んでほしいから、教科書に指定しているっていうのはあります。

(フロア5) これを、授業そのものではやらないけれど、こういうものがあるとやっぱり膨らんでくるから、読んでもらって、教科書として指定はしてはさせけれどね。文科省に対し

てのやはりある程度は景色を変えていく、私もいわゆる文科省の委員会とか聴講に行ったりしますけれども、やっぱり意見が違いますね。出版社としては、やっぱりこう文科省やところによっては厚労省ですけど、やっぱりねらいと内容を逆察してそれなりにお書きになる先生にこう書いていただければある程度売れるのですけれど、そういう科目じゃないと思うのですよね。ちょっとすいません。そろそろお返ししなくちゃいけないですね。

(野口) まさに、その発達の話ですとか、出版の話もそうなのですが、あとは本に関する知識というのがまだまだ自分に足りない部分があって、そこが抜け落ちているなというふうには思いました。

(中村) ありがとうございます。今日は3人の先生方で充実していました。質疑応答ではいつもとは違う方たちにもしゃべっていただきましたが、ありがとうございます。

## シンポジウム当日回収のアンケート結果

(質問別に集計；順不同)

Q1. パネラーへのご質問がありましたら、ご記入ください。

回答内容	職名
朝比奈先生のテキスト（読書と豊かな人間性）刊行後、日本の出版流通は大きく変化していますが、近年の講義では、その点についてどのような内容をお話になっているのでしょうか。また学生に反応はいかがでしょう。	-
小・中・高の段階的な系統性を保ちながら、司書教諭として読書教育のあり方を考える機会は実際のどの位あるのだろうか？また、どのくらい有効なのか（大きな疑問というか関心）と思いながらディスカッションを聞きました。	国語科教諭 (司書教諭)
野口先生に読書指導の変遷を講義されるようですが、どのような内容でどの程度教えられるのでしょうか。学生は変遷を知ることでも何を学ぶと思われませんか。	嘱託講師
現場では教師が読ませたいものと子どもが読みたい（読める）ものの食い違いを嘆く声がよく聞かれます。この点について何かお考えがあればお聞かせください。	司書教諭
(3名の方共通) ビブリオバトルについての見解をおきかせください。国立国会図書館の職員採用試験にもビブリオバトルが出題されました。ちなみに、ビブリオバトルは商標登録されています。	-
①全員の先に対して。中高生に対する読書指導について工夫されている点。小学生については話をしやすいのですが中高がむずかしい。読書材としてのラノベの扱い方。児童サービス論（司書課目）の授業との差別化は意識されていますか。 ②朝比奈先生に対して。読書能力の発達などについての時間数が多いようですが、教える際はやはり阪本一郎先生の論をまだ使われていますか。その他何かありましたら教えていただきたいです（←スイマセン、ディスカッションで話ができました [との追記あり]）何故読書指導の対象に就学時前の用事が入っているのでしょうか。そのサイトは？ 野口先生 “リテラシーサークル” “ブックカフェ” についてももう少し詳しくお聞きしたいです（スイマセン不勉強です）	非常勤講師
朝比奈先生に共感する部分が多いので、さらに次のことを教えてください ・「子どもの読書活動推進法」に対する批判 [ママ] 的視点をさらに詳しく ・「出版・流通の実態」をとり上げられる理由 ・「読書指導の方法」を具体的に取りあつかわれぬ理由 ・パネラーの皆さんにうかがいます ・（図をはなれても）個々の子どもが自らの成長にとって必要な本を自分で選んで読めるようになるためにはどのような働きかけが必要だと思われませんか。（成長するにつれて関心・興味が多様化してくることをふまえて）	-
科目名についてどうお考えですか？（「読書」とは何か、から始めるべきかも…と思いますが）	主査 (学校司書)
(朝比奈先生へ) 横浜市大時代、希望者へのレポートフィードバックをされていましたが、今でも続けられているのでしょうか？※お答え頂いたのでOKです (野口先生へ) 積極的でない受講者がいる場合はたらきかけはどうされていますか？	准教授
・選書の力を育成するとして、どのように教えていらっしゃいますか？ ・「読書指導」と「読書教育」という言葉を使いわけていらっしゃいますか？	-
朝比奈先生：分類、目録の重要性が低下したのは司書教諭だからか学校司書も含んで、時代が変化したからか 平井先生：司書教諭と学校司書でこの授業の内容はどう変わるか（私にはいちばん同じ内容に感じます）	助教
何故この科目名は「読書と学校図書館」ではないのでしょうか？	学校司書

Q2. パネラーへのご意見がありましたら、ご記入ください。

回答内容	職名
朝比奈先生へ「子どもの読書推進法」を批判的な視点で説明するというのですが、その内容は？	-
メディアの多様性と読書推進の関係性が興味深かったです。単なるスキル紹介の授業になってほしくない、という意見に共感します。	国語科教諭 (司書教諭)
豊かな人間性に関する読書の力と、授業で必要とされる読書の力とはどのように連携されると思いますか。又、どのように学生に伝えられますか。	嘱託講師
“読書と豊かな人間性”という科目名にはやはり異和感があります。せめて読書教育論/読書指導論に。“子ども”ということばを司書教諭課程で用いるのは(もちろん読進法の枠内ですが)実態とそぐわないように感じます。	非常勤講師
(野口先生)「特別なニーズをもつ児童生徒への読書支援」は重要だと思います。ぜひ広めていただきたいです。	主査 (学校司書)
読書材の紹介をいつも新鮮なものに見直したいと思っているけれど、それが一番むずかしいのです。どうインプットしているのでしょうか？	学校司書

Q3. この連続シンポジウムで議論したいことなどありましたら、ご記入ください。

回答内容	職名
司書教諭の専門性は一体どこにあるのだろう、という疑問があります。(特に国語(個人的にはなぜ「国語の教員が読書指導をすると本嫌いが増える」のか、という点に興味があります))の読書指導との関係性に興味があります)	国語科教諭 (司書教諭)
・教育方法によって大きく異なると思いますが、授業の受講人数、(サイズ)はどの程度が適切でしょうか？ ・「発達」について教育学は図書館情報学の範囲を超える内容はどこまで扱うべきか。	准教授
資格課程でどこまでガチでやるのか(needsに合っていない)をいつも迷いながらやっています。	学校司書

Q4. 本日のシンポジウムに対するご意見、ご感想がありましたら、ご自由にお書きください。

回答内容	職名
先生方の講義内容が具体的に示され、興味深かった。	-
野口さんのスタンスに共感するところが大きかったです。教員養成課程の専門科目としてすべての教員に必須であろうと思うのですが、実際には教員課程で扱う機会がありません。歯がゆさを感じつつ、自分のできる範囲で、教育実習や国語科の教科教育等の中で自校の図書館を紹介したり、場所として使ってもらったりしています。今回はブックトークの有効性に気づくことができました。大きな収穫です。ありがとうございました。	国語科教諭 (司書教諭)
私は“児童サービス論”を主として教えているので“読書と豊かな人間性”の授業内容をどのように組み立てているのかいつもモサクしています。いろいろアイデアをいただける内容でためになりました。ありがとうございました。	非常勤講師
朝比奈先生の「並べて比べて…」という話を久しぶりに伺えて嬉しかったです。	大学准教授
データベース的消費をどう教育の中でとらえるか、データベース的消費でないものの価値をどう学校の中で評価するか、ということだととりあえず自分の中でとらえました	助教
私は司書課程の「児童サービス論」を担当している立場と現場の「学校司書」としての立場から非常に刺激的な内容でした。やはり結局は自分の読書観(マンガ、ラノベ、ネットすべて「読書」なのでは? 「読書」の定義が人によってちがいすぎて後半の議論がおもしろくなくなりました。)、読書教育観がすべてつまり問われているな—と思いました。	学校司書

## 後日のパネラーの振り返り

朝比奈大作

「読書と豊かな人間性」という科目は、私にとっては実は苦手な科目で、嫌々ながらに担当してきたという事実があるのですが、今回のシンポジウムを通して、フロアの方々も含む<若い>視点に接することができ、大きな刺激を受けることができました。後1、2年で教師としては引退するはずなので、年寄りが出しゃばらない方がよいだらうと思っていたのですが、こういう機会を与えていただいたことには感謝に耐えません。

子どもを読書好きにするためには、心の底から「ああ面白かった」と思える本に出合わせてあげることが必要です。〈学習指導要領準拠〉の授業の中ではこうした出会いの機会を作ってやることは難しいでしょう。そこに学校図書館の出番があると考えます。中国や韓国なども含め、東アジアの人びとは「一定の知識を与える」教育にはひどく熱心ですが、「好きなものと出会わせる」「好きなものを選ばせる」教育はあまり重視されません。インターネットの時代であればこそ、大量の情報の中から自らに必要なものを選び取るための知識とテクニックが必要だと思います。そのためにどのような教育機会を作っていかなければならないのか、広い意味での「教員養成」に関わっているという点で、学校図書館の意義は大きいはずです。

教育とはやっかいなもので、どうしても「自分が受けてきた教育経験」に拘束されがちです。時代が変われば教育も変わらなければいけないはずなのに、自分が「教育者」であると自覚すればするほど古い常識にとらわれてしまうのが常なのです。新しいメディアを使いこなしている若い方々に、未来を切り開く新しい教育を目指した努力を続けてほしいと思います。

野口久美子

私自身は「読書と豊かな人間性」という科目について、「学習指導と学校図書館」と並列的な位置づけにあり、主に読書面の指導（読書指導）を扱うものと捉えています。そのうえで、授業では読書指導の方法を授けるというよりも、なぜ読書をする必要があるのか、学校で読書指導をする必要がするとあるならどのような視点で指導を行っていくことが重要なのか、一教員として児童生徒の読書活動にどのように向き合っていけばよいのか、といった問いにとことん向き合ってもらうことをねらいとしてきました。

お二人の先生、フロアとのディスカッションを通して、私に決定的に欠けていたのは、読書の重要性、読書指導の必要性について考えてもらった先にあると思ひ至りました。つまり、読書と発達段階、そして具体的な読書材に関する知識に関する話題提供及びディスカッションです。この点に関しては早速、来年度から策を練りたいと思います。

「教員になろうという人が本を読まないというのは言語道断」という考えのもと、子ども向けの本に自主的に接する機会を作ることを意図し、ブックトーク課題を課していますが、読書の量と質の双方を実質的に向上させる手立ても必要と感じています。このような機会を設けてくださった中村先生、足立先生、参加者の皆様に感謝申し上げます。

平井むつみ

子どもたちに、読書の楽しさを知ってほしいと思っています。そのためには、物語や小説だけでなく、さまざまな本が読めるようになってほしいと思っています。それが、子どもたちの考える力を引き出し、未来に向かって進む力になるとともに、より本を楽しむことになると思うからです。

子どもの読書推進については、本来、家庭が大きな役割を担うべきであろうかと思うのですが、それが十分ではない状況の中では、学校が、家庭や地域と連携しながら、その役割を担っていくしかないと思います。その学校での読書推進は、「読む喜び」を知ることが第一としたうえで、やはり、さまざまな本が読める力を培う読書活動を進めていかなければならないと思っています。

司書教諭はそのような学校での読書活動を支え、推進していくのがその役割であるなら、司書教諭として子どもの読書に関わっていこうとする人たちに、いったい何を伝えればいいのか。そのことを考えることは、現在の学校図書館の読書推進活動について考えることでもあると思います。現在行われている読書推進のための活動はどうか。これで十分なのか、新たな読書活動のプログラムを考えるとしたら、何をどう考えればいいのか。そして、その読書を支えていくには、学校図書館は、どのような図書館を作っていけばいいのか。また、それを現在の大学生に、どのような授業をすれば伝わるのか。

そのようなことを考えれば考えるほど、授業を変えなければ、という思いが募っていました。今回お二人の先生のお話しをお聞きし、参加された方のお話もお聞きする中で、ふっと視野が広がったり、方向が見えた気がしたりしました。

どこまでできるかわかりませんが、学校に、子どもの読書と学校図書館についての知識と理解をもち、現場を変えていく力をもった司書教諭が増えていくことを思い描きながら、私自身の授業を変えていきたいと思っています。